★香川県教育委員会研究団体等研究委託事業★
ーさぬきの授業　基礎・基本　実践事例集ー

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた実践事例集(Ⅱ)

小学校編

平成31年2月
香川県教育委員会

目　次

Ⅰ　はじめに ・・・１ｐ

Ⅱ　実践例

＜主体的な学びの視点からの授業改善例＞
○　要旨に対して意見を持つために、抽象的な概念を具体物に置き換えて考える場を設定する（国語）・・・・２ｐ
○　氏名や県名などから、文字の大きさに配慮したらよい例を紹介し合う活動を展開する（書写）・・・・・・３ｐ
○　課題を自分のものとし、資料を操作したり、事象のつながりを考えたりする場を設定する（社会）・・・　４ｐ
○　具体物、図、式などを互いに関連させながら説明する場を意図的に設定する（算数）・・・・・・・・・・・５ｐ
○　主体的な説明活動や考えの交流を生み出す４コマ漫画の活用（理科）・・・・・・・・・・・・・・・・・・６ｐ
○　課題を自分事として捉えられるよう、見通しをもたせる場を設定する（生活、総合的な学習の時間）・・７ｐ
○　鑑賞曲を聴いて、曲の進み方を捉えることができるような支援をする（音楽）・・・・・・・・・・・・・８ｐ
○　自分の学びや変容を自覚できるようにする学習の振り返りの場面を授業に位置付ける（図画工作）・・・・９ｐ
○　課題解決に向かって、知識を関連付けながら試行錯誤する活動を設定する（家庭）・・・・・・・・・・１０ｐ
○　解決するべき課題を明確にし、主体的に学習できる「簡易化されたゲーム」を行う（体育）・・・・・・１１ｐ
○　生活と関連付けながら、登場人物が学んだことについて話し合うことで、道徳的価値の理解を深め、
　　道徳的実践意欲を高める（道徳）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２ｐ
○　コミュニケーションの目的や場面、状況を意識しやすい、必要感のある課題を設定する（外国語活動）１３ｐ

＜対話的な学びの視点からの授業改善例＞
○　友達の読み取りとのちがいを知り、対話したい思いが高まるように、読みを可視化する（国語）・・・・１４ｐ
○　児童の氏名（平仮名）に含まれる「はらい」の数を確かめ、友達と比べる活動を展開する（書写）・・・１５ｐ
○　実社会の人の営みを学び、社会的事象の見方・考え方を広げ交流する場面を設定する（社会）・・・・・１６ｐ
○　グループ活動のさせ方を工夫することで、目的をもって話し合えるようにする（算数）・・・・・・・・１７ｐ
○　４コマ漫画を活用して、自分の考えを説明したり、友達と考えを比べたりする（理科）・・・・・・・・１８ｐ
○　１年間の「楽しかったことベスト３」を考え、友達と話し合う活動を設定する（生活、総合的な学習
　　の時間）・・１９ｐ
○　言葉だけにたよらない対話を生み出すことができるような支援をする（音楽）・・・・・・・・・・・・２０ｐ
○　対話によって自分の考えを広げたり深めたりするために必要感のある交流場面を設定する（図画工作）・２１ｐ
○　「どうしたら上手にゆでられるか」を問い続ける題材構成の中で、思考の可視化を図る（家庭）・・・・２２ｐ
○　課題の解決に向けて、チームで対話を重ねながら、思考を深める場面を設定する（体育）・・・・・・・２３ｐ
○　価値について、自分の考えと比べながら他者の感じ方や考え方を聞く場を設定する（道徳）・・・・・　２４ｐ
○　伝えたい、知りたい情報のやり取りを行う言語活動を設定する（外国語活動）・・・・・・・・・・・　２５ｐ

＜深い学びの視点からの授業改善例＞
○　文章構成マップで、共通教材の学びを活用する（国語）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６ｐ
○　きまりの合理性をつかむために、「どうしてこの筆順？」と考える活動を取り入れる（書写）・・・・・　２７ｐ
○　比較・関連付けを促す問いを設定したり空間的視野を広げる資料を活用したりする（社会）・・・・・・２８ｐ
○　着目させたい見方（統合的な見方）を明確にして活動を工夫する（算数）・・・・・・・・・・・・・・２９ｐ
○　根拠を明確にしながら予想したり、結果をもとに考察したりする場を設定する（理科）・・・・・・・・３０ｐ
○　植物の特徴を知ることで、よりよい世話の仕方に気付き、実行する場を設定する（生活、総合的な学習
　　の時間）・・３１ｐ
○　児童が多面的に音楽に関わることができるよう、題材計画を工夫する（音楽）・・・・・・・・・・・・３２ｐ
○　形から見取ったイメージを広げるために、新たな視点や技法を提示し話し合う場を設定する（図画工作）３３ｐ
○　「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせ、根拠をもって考え、表現する場を設定する（家庭）・・・３４ｐ
○　子どもが試行錯誤したくなるような課題を提示する（体育）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３５ｐ
○　自らの経験を想起し、様々な視点で考えながら、道徳的価値への理解を深める問いを設定する（道徳）・３６ｐ
○　「できる」という表現に慣れ親しむために、できるだけ多くの人と交流する場を工夫する（外国語活動）３７ｐ

Ⅰ　はじめに

新学習指導要領解説（各教科編）では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に向けて、留意すべき点として次の６点を示しています。（一部要約）

○　これまで取り組んできた実践を否定したり、異なる指導方法を導入したりする必要はないこと。
○　授業の方法や技術の改善のみを意図するものではなく、児童生徒に目指す資質を育むために「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の視点で授業改善を進めること。
○　各教科等で行われている学習活動（言語活動、観察・実験、問題解決的な学習など）の質を高めることを主眼とすること。
○　単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見通し振り返る場面をどこに設定するか、対話する場面をどこに設定するか、児童生徒が考える場面と教師が考える場面をどのように組み立てるかを考え、実現を図ること。
○　深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になること。（各教科等の「見方・考え方」は、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である）
○　基礎的・基本的な知識及び技能の習得に課題がある場合には、その確実な習得を図ることを重視すること。

本冊子は、『「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた実践事例集』の第２編です。昨年に引き続き、香川県小学校教育研究会に「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に関する実践研究を行っていただき、提供いただいた９０事例のうち３６事例をまとめたものです。本冊子では、教育現場のニーズをもとに、新たに「外国語活動」や「特別の教科　道徳」の実践事例を掲載しています。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、現職教育や教科部会等で活用されることで、目の前の子どもの実態に即した授業改善が充実していくことを願っています。

なお、本冊子で紹介できなかった事例については、県教育センターのホームページに掲載していますので、ぜひご覧ください。

要旨に対して意見を持つために、抽象的な概念を具体物に置き換えて考える場を設定する

本時、こんな力を育てたい

要旨を正しく捉えた上で、それに対する自分の考えを、立場を明確にしてまとめる力

本時の流れ

1　前時までの学習からイースター島の事実を振り返り、本時の学習課題を確認する。

↓

2　結論部分を読み、要旨をまとめる。

↓

3　モアイ像制作の是非について話し合う。

↓

4　要旨に対する自分の考えをまとめ、これからの生き方につなげる。

【授業の概要】

事実と意見とを関係付ながら説明文を読み、筆者の主張に対して自分の考えをまとめる単元です。

本時は、要旨に対する自分の考えを明確にするために、まず具体物であるモアイ像制作の是非を問う話合いの場を設定しました。この話合いを通して、抽象的に書かれている要旨に対しても自分の考えを持ちやすくなり、自分の考えに自信が持てたり考えの幅が広がったりすることにつながると考えました。

＜学習前の児童の姿＞

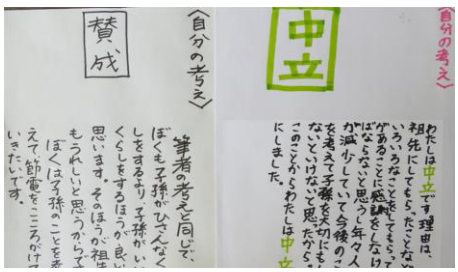
イースター島の悲しい事実が分かったぞ。筆者がそこから学んだことに対して自分の考えを発表するぞ。

児童は、筆者が「『祖先を敬う文化』よりも『子孫の幸せを願う文化』を早急に築くべき」と考えた理由について、「モアイを作った人々は数世代後の子孫の悲惨なくらしを想像することができなかったのか」という文にヒントがあると考えました。そこで、要旨に対する考えをまとめる前にモアイ像制作の是非について「賛成」「中立」「反対」のいずれかの立場に立って話し合う場を設定し、互いの意見を交流させました。

ここがポイント！　教師の支援

要旨にかかわる「祖先を敬う」、「子孫の幸せを願う」文化はどちらも大切なので、どちらかを選ぶのは難しい選択です。そのうえ「文化」という抽象的な概念は子どもたちにとって捉えにくいものと考えられます。そこで、祖先を敬うために制作され、森林を失う一因になったといわれるモアイ像を取り上げ、制作の是非を考えさせることで、抽象的な概念が具体性を帯び、自分の考えを持ちやすくできると考えました。また、その学びを生かして、要旨に対して自分なりの考えを持ち、モアイ像制作についての考えを根拠に示しながらまとめられるのではないかと考えました。

この学びを通して、子どもたちは自分の意見を持つことの大切さや意見を伝え合うことの楽しさを感じていました。



【要旨に対する自分の考え】

＜学習後の児童の感想＞

モアイ像制作に反対の立場の意見を聞いて、「子孫の幸せを願う」ことは大切だと改めて思ったよ。要旨に対する自分の考えに自信を持つことができてうれしかったよ。

氏名や県名などから、文字の大きさに配慮したらよい例を紹介し合う活動を展開する

本時、こんな力を育てたい

２文字以上の漢字表記では、画数や口で閉じる形などに着目し、相対的な大きさを考えて書き分けていこうとする力

本時の流れ

1　字幅と高さが同じ「香」と「川」、「川」と「口」をそれぞれ比較し、相対的な見方で適切な大きさをつかむ。

↓

2　氏名や県名から、相対的に小さく書いた方がよい漢字を含む例を見つける。

↓

3　小さく書いた方がよい漢字として、画数が少ないものや口で閉じる形のものなどの基準をつかむ。

↓

4　ペアやグループで、他の例を探し、見付けたものを紹介し合う。その都度書いてみて確かめる。

【授業の概要】

身近な固有名詞を学習対象、範囲とすることで、日常生活に役立つという有用感や自分や友達のためにという目的意識・相手意識を喚起しながら、「主体的に探す」、「主体的に生かす」ことができるように工夫してみた事例です。

＜学習前の児童の姿＞

平仮名は漢字より小さく書くと学習したけど、漢字でも小さく書く字があるのかな。

【本時の学習】

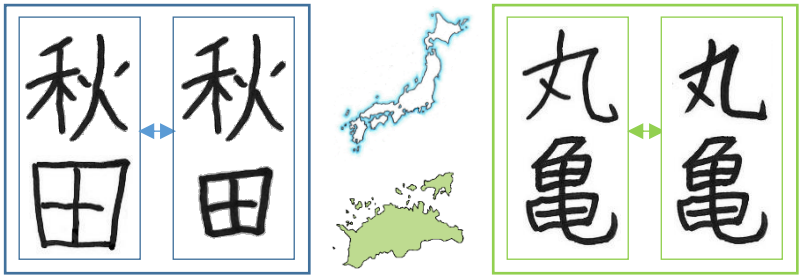
２文字以上の漢字で表記される語句に関して、日常生活での必要性から重視されるのは、氏名や住所などの固有名詞でしょう。そこで、これらを対象に、適切な大きさを考える活動、そこで見付けたことを紹介し合う活動、その通りに書いてみる活動を進めます。

ここがポイント！　教師の支援

児童が自身の姓や名に使われる文字について、大きさを調べることで、まずは、自分との関わりを意識した「主体的な学び」を促します。自分と関係がある都道府県名にも広げるとよいでしょう。ここからピックアップされた小さく書いた方がよい例から、「こういうときは、この漢字はこれくらい小さく書くとよい」という基準を具体化させます。

次は、それを「みんなに知らせよう」という意識に基づいた「主体的な学び」へ発展させます。様々な氏名や県名、郡市名など名簿や一覧を活用しながらペアやグループで調べていきます。そして、分かりやすく紹介するために、小さく書いた例と書かなかった例を比べられるように実際に書いたモデルシートを作ります。

このモデルシートを紹介し合いながら個々に適切な大きさで書いてみる活動につなぎ、「これまでとは違う」という実感に結び付くようにします。



【モデルシート例】

＜学習後の児童「書口写一」（仮名）の感想＞

「口」や「一」を小さくすると、自分でも大人が書いたような気分になります。年賀状などのあて名を書く時にも役立つと思います。

課題を自分のものとし、資料を操作したり、事象のつながりを考えたりする場を設定する

本時、こんな力を育てたい

ごみ減量のために、行政・地域・家庭が連携して取り組んでいることに気付き、自らも主体的にごみ減量に取り組もうとする力

本時の流れ

1　最終処分場が１０年延長できた理由について、持ち寄った資料を確認する。

↓

2　取組の内容や主体に目をつけて、グループで資料を分類する。

↓

3　ごみの有料化や分別がごみ減量にどのようにつながるかを話し合う。

↓

4　人々の協力や連携でごみ減量がされていることをまとめ、次時の課題をつかむ。

【授業の概要】

本単元は、ごみ処理の流れを調査し、まとめていくことで、循環型社会を実現するために、社会の一員としての態度を育てていく。単元を通して、子どもの問いを大切にし、資料を自主的に収集したり、体験活動を仕組んだりすることで、常に児童が主体となって学習に取り組むことを目指した。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞
なぜ、最終処分場は予定より 10 年も延長して使用することができるようになったのかな？

まず、児童は本時までに身近な所からごみ減量につながる取り組みを見つけてきている。本時、その資料を教師が精選して使うことで、課題が自分のものとなり、意欲的に学習に取り組めるようにした。その資料の類似点に目をつけて分類することを本時の中心にすることで、交流の必要性が生まれ、活発な話し合い活動となった。

ここがポイント！　教師の支援

授業を通して，さらに大切なことはこれからの生活につなぐことである。本時では、分類で終わるのではなく、それらの取り組みがごみ減量とどのようにつながるのかを思考する場面を設定した。例えば、分別については、実際にごみをその場で分別する作業を通して、視覚的に燃えるごみが減少したことを捉えるようにした。このように、事象がつながることで社会認識が深まっていくと考える。

また、分類の視点を取組の主体に変更することで、行政・地域・家庭といったそれぞれの立場での協力の大切さに気付き、自分の取り組みがさらに最終処分場の延長へつながることが理解できていた。この理解こそが、社会の一員として主体的に参画していこうとする態度につながる。

【ごみ減量について話し合う様子】

【分別作業する様子】

＜学習後の児童の感想＞
色々な立場でのちょっとした取組が、最終処分場の延長につながったんだな。私たちにも、残菜をなくすなどできることがたくさんありそうだ。

具体物、図、式などを互いに関連させながら説明する場を意図的に設定する

本時、こんな力を育てたい

日常の事象から見いだした問題を抽象化して処理し、その結果を再度具体化して考える力

本時の流れ

1　学習課題を提示する。

↓

2　抽象性の違う４つの教具を使って、立てられる本の数について自分の考えをもつ。

↓

3　選択した教具を使って、グループや全体で意見を交流する。

↓

4　練習問題に取り組む。

↓

5　学習内容をまとめる。

【単元の概要】（全８時間）

余りのあるわり算の意味を理解し、計算ができるようになるとともに、場面に応じた適切な余りの処理の仕方を身に付けることを目指す単元です。

余りのあるわり算の計算の仕方を習得すると、問題から機械的に立式し、答えを求めることになりがちです。そこで、毎時間グループ交流を行い、グループ内の児童全員が具体物や数図ブロック、図等を使って自分の考えを友達に説明する場を設けることで、問題場面と教具、式をそれぞれ関連させながら、主体的に考えを深められるようにしました。

【本時の学習】（７時間目）

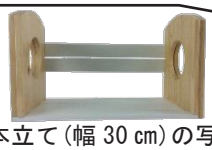
＜学習前の児童の姿＞

余りをどうするかは、問題に書いていないよ。どうしたらいいのかな。

教師が「家にある本立てにこんな本を買って立てたいのだけれど、何冊まで立てられるのか分からなくて、困っている。」と投げかけ、写真を見せながら問題を提示しました。

本立ての幅は何㎝ですか。

本の厚さは何㎝ですか。



【本立て（幅 30 ㎝）の写真】

【本（幅 4 ㎝）の写真】

児童から出た質問を整理し文章にすることで、自身が解決すべき課題として児童は問題場面を捉えられました。

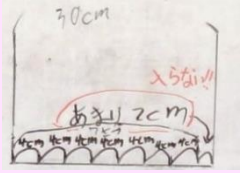
ここがポイント！　教師の支援

自分の考えをもつ場面では、抽象化の度合いがそれぞれ違う４つの教具の中から、児童が使いたいものを選択できるようにしました。

【本立てと本の模型】

【本立ての枠線のある図】

【本立てと本のイラスト】



【すべて自分でかいた図】

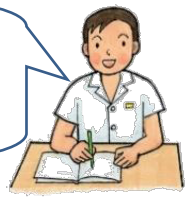
問題場面に関連させながら自分に合った教具を操作することで、児童は自らの考えを整理し、グループ交流にむけて自らの考えをもつことができました。さらに、自分の考えを他の友達に伝えたいという意欲も高まりました。

【教具を使った交流】

児童は選択した教具を使いながら考えを交流し、自分の考えと比較しながら、具体物や図を使うと問題場面や考え方が捉えやすくなることを実感しました。そして、児童は余りがどのような状態であるのかを、式とつないで理解していきました。また、商と余りの単位が違うことに気付き、余りのあるわり算への理解が深まりました。

＜学習後の児童の感想＞

余りをどうするか考えるには、問題の場面に戻るのが大事なんだね。



主体的な説明活動や考えの交流を生み出す４コマ漫画の活用

本時、こんな力を育てたい

自然の事物・現象から見いだした問題について追究し、より妥当な考えをつくりだす力

本時の流れ

1　４コマ漫画を使って、大地のでき方を説明したり、実験方法を確認したりする。

↓

2　予想や実験方法を吟味しながら実験を繰り返し行い、大地のでき方を確かめる。

↓

3　４コマ漫画を使って、実験の結果を記録し、大地のでき方を考察する。

↓

4　学習活動を振り返って、本時の意味づけや次時の問題づくりを行う。

【授業の概要】

地層は、時間、空間の尺度が大きいという特性をもっています。そこで、児童の時間的、空間的な見方を広げたり、表現力、理解力を補完したりする支援として、４コマ漫画を活用しました。本時は、予想の交流と、結果の処理から考察の展開で、児童が４コマ漫画を使って、自分の考えを説明したり、修正したりする場面を設定しました。

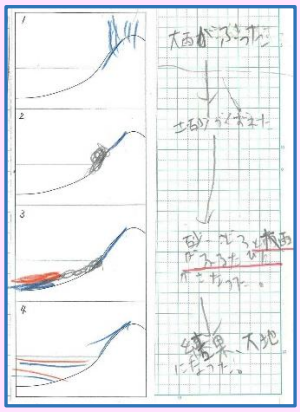
【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

自分が住んでいる地域は、どのようにして海から大地になったのだろうか。砂と泥は、どのようにして交互に重なったのだろうか。

ここがポイント！　教師の支援

前時に、児童は流れる水の働きによる地層のでき方を予想し、４コマ漫画に表現しました。本時までに、教師が児童の考えを類型化し、実験方法、実験道具を児童とともに検討しました。



【４コマ漫画による予想】

活動１では、代表の児童が、拡大した４コマ漫画を使って、砂や泥がどのように堆積していくかを説明しました。事象の変化が視覚化されているため、共通点や相違点が捉え易くなります。活動３では、活動２の結果をもとに、４コマ漫画を修正し、主体的に考察することができました。

【４コマ漫画を使っての説明】

活動２では、沈みやすい土を使用し、時間内に何度も実験できるようにしました。結果を吟味しながら何度も再実験することで、自分の考えを確認したり、実験方法を修正したりする姿が見られました。

【実験の様子】

＜学習後の児童の感想＞

実験をすると、自分の住んでいる大地が、どのようにしてできたのかが分かりました。４コマ漫画にすると、自分の考えを表したり、友達の考えと比べたりしやすかったです。

課題を自分事として捉えられるよう、見通しをもたせる場を設定する

本時、こんな力を育てたい

校区文化祭に対して関心をもち、目的を明確にして計画をたて、見通しをもって活動する力

本時の流れ

1　校区文化祭について、知っていることを話し合う。

↓

2　センター長さんに、校区文化祭について教えてもらう。

↓

3　校区文化祭で、何ができるか考える。

↓

4　本時の学習を振り返り、校区文化祭までの活動の見通しをもつ。

【単元の位置付け】

本校の総合的な学習は、「地域を誇りに思い、ふるさとを大切に思う子どもを育てる」ことをねらいとしています。これまでに、３年で地域を元気にしてくれる人を、４年では自然と伝統文化（農村歌舞伎）の残る東谷地区のよさを見つける活動を続けています。５年では、秋の校区文化祭に「川東アピール隊」として参加し、地域の一員として活動する社会参画を目標とした単元を行っています。一緒に活動する中で、地域を盛り上げようとする人たちの思いや願いを知り、地域の一員としての自覚をもたせたいと考えています。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

校区文化祭って、何のためにしているのかなあ。ぼくたちにできることって何だろう。

児童に、校区文化祭のことを尋ねると、秋に校区文化祭をしていることは知っていても、誰が、何のためにしているのか詳しいことは知りませんでした。自分たちにできることを考えると、お店の手伝い、ポスター作りなど、一般的な考えが多く、自分事として考えているようには感じませんでした。そこで、校区文化祭の実行委員であるコミュニティセンターのセンター長さんに聞いてみることにしました。

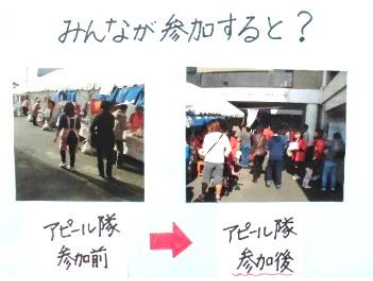
ここがポイント！　教師の支援

センター長さんにお願いしたことは、次の３つです。

①どんな人たちが、参加して盛り上げようとしているのか。

②子どもたちが参加することで、どのような変化があったのか。

③文化祭に対する実行委員さんの願いや思い。



【参加前と後の比較した写真】

児童が、イメージしやすいように、昨年の文化祭の様子や共同募金の金額など比較しやすいものを視覚的に表し、何のために参加するのか、目的を明確にすることに配慮しました。

話を聞くことで、この活動を通して人と人の結び付きを強めたいという思いをもっていることに気付きました。そのためには多くの人に来てもらうことが必要だと感じ、人を集めるためにできることを考え始めました。小さい子や小学生でも楽しめるお店を開く。スタンプラリーをして、いろいろなお店に立ち寄れるようにする。お店をアピールするポスターを作るなど、子どもたち一人ひとりが、自分事として参加の方法を主体的に考えるようになりました。

＜学習後の児童の感想＞

ぼくたちが参加することで、地域の人は、たくさんの人が集まってくることを期待しているんだな。子どもが集まれば、大人も来るんじゃないかな。

鑑賞曲を聴いて、曲の進み方を捉えることができるような支援をする

本時、こんな力を育てたい

オーケストラの楽曲を聴いて、旋律が反復したり、使われる楽器群が変化したりすることに気付き、そのおもしろさを味わう力

本時の流れ

1　「組曲『カレリア』から行進曲風に」の旋律アとイを聴き、口ずさむ。

↓

2　２つの主題を聴き比べ、繰り返し使われたり、楽器が変化したりすることに気付く。

↓

3　演奏する主な楽器に着目して、気付いたことをワークシートにまとめる。

↓

4　学習したことを振り返りながら、１曲通して「組曲『カレリア』から行進曲風に」を聴く。

【授業の概要】

「組曲『カレリア』から行進曲風に」を鑑賞し、主な旋律の反復や変化とその旋律を演奏する主な楽器が変わっていくおもしろさを感じ取る題材です。

本時では、アとイの２つの主題が反復していることに気付かせるために、真似て口ずさんだり、聴き取って手を挙げたりするなどの工夫をしました。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

オーケストラの音楽を聴くことは楽しいな。でも、長い曲を聴くと、途中であきてしまうよ。

同じ旋律が繰り返されたり、演奏する楽器群やその組み合わせが変わったりするおもしろさを体全体で感じ取るとともに、楽器の音色による印象の違いを捉えることができるようにしました。

ここがポイント！　教師の支援

アとイの２つの旋律が反復していることに気付かせるために、まず、アとイの旋律のみを口ずさむようにしました。教師がピアノで旋律を弾き、アの旋律かイの旋律かを当てるクイズをしました。旋律の違いに集中して聴けるようにＣＤ音源でも同様に行い、旋律を確認しながら鑑賞しました。主旋律の部分ごとに区切って聴かせることで、児童は迷いながらも曲に集中して聴くようになり、旋律が反復していることに気付くことができました。また、活躍している「楽器さがし」をしました。聴こえてくる楽器の名前を書いたり、楽器群ごとに色分けをさせたり等、視覚化することで、児童は楽器の組み合わせが変わっていくことにも気付き、音色による印象の違いを実感することができました。

弦楽器・・・赤
金管楽器・・黄
木管楽器・・緑

【曲の構成が視覚化できるワークシート】

＜学習後の児童の感想＞

１曲を通して聴くよりも、部分ごとに区切って聴いてみると、「反復・変化」がよく分かりました。先生からクイズを出されたので、この旋律はアの部分なのか、イの部分なのかを耳をすませて聴きました。

自分の学びや変容を自覚できるようにする学習の振り返りの場面を授業に位置付ける

本時、こんな力を育てたい

身近で扱いやすい材料や用具に十分に慣れ、並べたり、つないだり、積んだりするなど手や体全体の感覚などを働かせ、活動を工夫してつくる力

本時の流れ

1　前時の活動を振り返り、よりよいところや面白いところを発表する。

↓

2　約束を確認し、並べたい場所で並べたい材料を並べる。

↓

3　「みるみるタイム」でいったん活動を止め、自分や友達の表現のよいところを発表する。

↓

4　見付けたことを生かしながら、並べる。

↓

5　名前カードを置き、ワークシートで振り返る。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

「１にしびじゅつかん」で６年生に見てもらいたいな。

【自分で選んだ碁石を並べる児童】

児童は、前時までに自分たちで並べてみたい材料を考え、碁石・色棒・ペットボトル・段ボール・色板などの材料を集めておきました。本時は、並べたい場所で並べたい材料を選び、グループになり活動しました。そうすることで、児童が材料に進んで働きかけ、思いのままに発想や構想を繰り返すことにつながりました。

ここがポイント！　教師の支援

学習の後半、教師が写真を撮っておき、それを使って表現の面白さを友達に伝える場を設けました。児童は、材料を並べることを楽しみ、見るということをあまり意識していませんでしたが、「みるみるタイム」で集合し、並べたものをテレビに映すことで意識して鑑賞し、自分や友達の表現の面白いところを話し合いました。そうすることで、次の活動で自信をもって並べたり、もっとこうしたいと考えが広がったりしました。

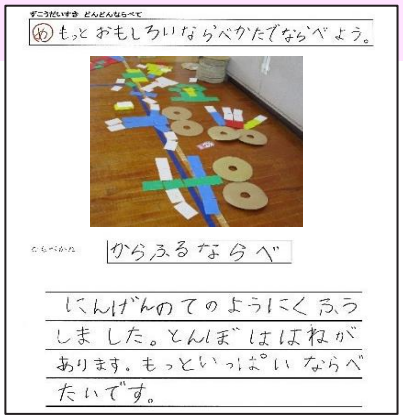
【表現の面白さを友達に伝える児童】

終末では、自分の形の工夫した並べ方が分かるようにワークシートで振り返りました。自分の並べたところに名前カードを置き、並べ方や工夫をワークシートに書き、話し合いました。自分の並べ方に自信をもって話したり、友達のよさをたくさん見付けたりできる児童の姿が見られました。自分の学習を振り返り、次の活動へと意欲を高めることができました。

【名前カード】【並べたところに置いた名前カード】

＜学習後の児童の感想＞

面白い並べ方を考えながら、どんどん並べることができました。そして、自分や友達の面白い並べ方を話し合うことができました。



【並べ方や工夫を書いたワークシート】

課題解決に向かって、知識を関連付けながら試行錯誤する活動を設定する

本時、こんな力を育てたい

体験的な活動を通して、バッグを作る際の布の大きさには、ゆとりや縫いしろを加える必要があることに気付き、製作に生かそうとする力

本時の流れ

1　エコバッグを作る際に必要な布の大きさを予想する。

↓

2　透明ビニールを布に見立て、バッグを試作する。

↓

3　全体交流を通して、ゆとりや縫いしろの必要性を理解する。

↓

4　ゆとりや縫いしろの役割について考え、まとめる。

【出し入れのしやすさを確かめる児童】

【自分で大きさを決めて作ったバッグ】

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

バッグを作るには、どのくらいの大きさの布が必要なのだろう。

入れる物は同じなのに、人によって予想した布の大きさが違うのはなぜだろう。

題材導入時には、目的意識をもたせるとともに、学習意欲が継続するように、自分や家族が使うエコバッグを作ることを共通理解しました。

本時は、袋作りの基礎･基本である、ゆとりと縫いしろに焦点を当てて考えられるように、入れる物の大きさを揃え、共通に学ぶ場を設定しました。

まず、必要な布の大きさについて、個々に予想を立てさせます。すると、児童の考えに違いが生まれ、「入れる物の大きさは同じなのに、なぜ人によって布の大きさが違うのか」という問いが生まれ、それを解決するために、バッグの試作を行います。そして、それを基に話し合うことで、どのくらいの布の大きさが必要となるのかを確かめていきました。

ここがポイント！　教師の支援

活動２-①＜協同的な作業＞

・各自が考えをもった上で、試作は３～４人の班で行い、意見を出し合いながら最適解を見いだすように促します。

活動２-②＜可視化＞

・ゆとりを可視化するために、中に入れる物を透明のビニールで包む活動を取り入れました。

活動３-①＜体験的な活動＞

・布の大きさについて話し合う中で、ゆとりや縫いしろの必要性に気付くことができるようにしました。

活動３-②＜学び合い＞

・ゆとりや縫いしろのことを考えて作った班にその理由や分量について問い、児童同士の学び合いを大切にしました。

＜学習後の児童の感想＞

バッグを作るときには、入れる物の大きさだけでなく、縫いしろやゆとりを考えて、布の大きさを決めなければいけないことが分かりました。

解決するべき課題を明確にし、主体的に学習できる「簡易化されたゲーム」を行う

本時、こんな力を育てたい

ゲームに勝つために、チーム一丸となってたくさん得点するための攻撃方法を考える力

本時の流れ

1　授業の流れやゲームのルールを確認する

↓

2　試しのゲーム①を行う。

↓

3　ルールの確認・修正を行う。

↓

4　試しのゲーム②を行う。

【授業の概要】

ボール運動ゴール型では、児童の実態に合わせた「簡易化されたゲーム」を行います。

本時は、初めてゲームを行うため、授業の流れを確認すると共に、ゲームに慣れる時間を確保します。児童の実態（投補技能や戦術的認識など）に応じて、チームの課題を把握・分析しやすい簡易化されたゲームになるように教材化を図ります。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞
　初めて行うゲームだけれど、うまくできるかな。チームのみんなと協力して勝てるかな。

第１時間目の学習となります。初めて出会う教材に喜びや不安を感じている児童です。すべての児童が興味をもち、「これならば、できそうだ」と感じられるゲーム教材を提示しました。

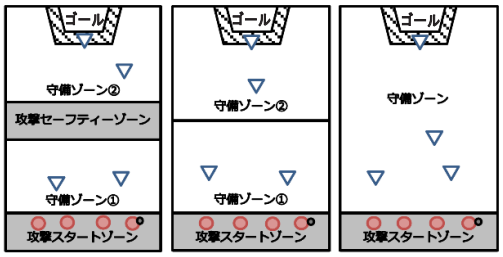
ここがポイント！　教師の支援

一般的に知られているハンドボールは、ドリブルやシュートなどの技能を使い、難しいルールで行われています。８時間単元の授業で、ゲームを楽しめるまでに、技能を高めることは難しいです。

そこで、「簡易化されたゲーム」を取り上げます。操作しやすいようにボールの大きさや柔らかさを工夫します。空気を抜くだけで、手でつかみやすくなったり、はねにくくなったりします。これでボール操作をドリブルなしでパスをつなぐことに制限します。また、コートは体育館にある既存のコートを利用し、ゴールは片側の１つの一方向型のコートを用います。

解決すべき課題を「得点するためには何が大切か」に焦点化するためには、「４対２」や「３対２」の攻撃が有利な条件の人数で行います。２分間、攻撃だけを繰り返し行います。守備が入れない制限区域を用いることで、常に攻撃をどのように組み立てればよいかを考えながらゲームができます。

すべての児童が課題解決に向け、主体的に学習することができるよう、ゲームの簡易化を図りました。



●・・・攻める人▽・・・守る人 ●・・・ボール

【攻撃しやすく、得点しやすいコートの工夫例】

操作しやすいボールを用いることで、誰もが攻撃に参加できました。攻撃がしやすくなっているので、初めてのゲームでも得点することができました。見通しをもち、「相手より１点多く取るためにどうすればよいか」という課題を解決する学習ができました。

＜学習後の児童の感想＞
　もっとたくさん得点するために、パスを工夫したい。チームで話し合って、捕りやすいパスをつなげよう！

【主体的な学び】　小学校第３学年　道徳科　主題「誰かのために」　教材「さぬきなのいために」

生活と関連付けながら、登場人物が学んだことについて話し合うことで、道徳的価値の理解を深め、道徳的実践意欲を高める

本時、こんな力を育てたい

働く上で大切な心について考え、進んでみんなのために働こうとする道徳的実践意欲

本時の流れ

1　自分の生活チェックカードを使って自分の働きぶりについて振り返る。

↓

2　教材文を読み、本時の課題をつかむ。

↓

3　主人公が登場人物から学んだことについて考え、働く時に大切な心について話し合う。

↓

4　教材から学んだ心の中から自分に取り入れたい心について考え、道徳的実践意欲につなぐ。

【授業の概要】

この教材は主人公「光一」が地域の人や母親と一緒に「さぬきなのいために」を作りながら、働く時に大切な心に気付く教材である。「お仕事大作戦カード」で自分の仕事ぶりについて振り返りながら考えることで、道徳的実践意欲が高まるようにした。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

仕事をするのは楽しいけれど、どんな心で仕事をすればいいのかはよく分からないな。

まず、児童は「お仕事大作戦カード」を用いて自分の働きぶりについて振り返った。次に、教材「さぬきなのいために」を読み、主人公が登場人物から学んだことを探り、「働く時に大切な心」について話し合った。

ここがポイント！　教師の支援

①「逆ピラミッドチャート」を活用した板書

主人公が登場人物から学んだ「働くために大切な心」を考える場面では、板書上に思考ツール「逆ピラミッドチャート」を活用し、「働くために大切な心」が黒板中央に集約されるように構造化した。

②ゲストティーチャーの説話

授業の終末には栄養教諭から本時の学びに関連する説話を聞き、児童の身近なところにも、相手意識を持って働いている人がいることを伝えるようにした。

これらの活動を通して、「お仕事大作戦カード」のめあてを見直し、新しいめあてを加えた。さらにこれから自分がどのような心を取り入れて仕事をするのかを考えていくことで実践意欲を高めた。

【給食栄養教諭の説話】

＜学習後の児童の感想＞

- 感謝の気持ちをもって丁寧に仕事をしたい。
- 中庭を通る人のことを考えて草を抜きたい。みんなとやれば楽しくなる。

コミュニケーションの目的や場面、状況を意識しやすい、必要感のある課題を設定する

本時、こんな力を育てたい

既習の表現をもとに思考判断し、尋ねられたことを理解して、自分の考えや思いを表現しようとする力

本時の流れ

1　オリジナルの名札を作るという活動を知り、本時の見通しをもつ。

↓

2　活動で使う表現や文の構造を確認し、練習する。

↓

3　お店屋さん形式で友達と英語でのやりとりをし、オリジナル名札を作成するための材料(シール)を集める。

↓

4　本時の振り返りと、単元のまとめをする。

【授業の概要】

本単元は、前単元で慣れ親しんだ「I like ～.」の表現を使って、「What do you like？」と聞かれた場合の、会話を楽しむように設定されたものである。

チャンツやゲームによって繰り返し慣れ親しんだ語彙や表現を活用して、児童が自信を持って外国語を用いてコミュニケーションが図れるように工夫した。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

シールをもらう言い方はこれであっているのか自信がないな。日本語で言ってしまおうかな。

１年間を通して使用する名札を、自分好みにデコレーションするという課題を設定することで、児童の興味・関心や学習への意欲を高めるようにした。また、その材料となるシールを手に入れるためには、お店屋さん形式で「What ○○ do you like？」「I like △△.」のやりとりをしなくてはならないという場を設定したことによって、会話の必要感が生まれた。

しかし、児童らは外国語の学習を始めて日が浅く、１対１のコミュニケーションとなると、途端に自信を失う児童が見られたため、以下のような支援を行った。

ここがポイント！　教師の支援

① 板書の工夫

What | shape / color | do you like ?

↑

この部分を変えるだけで「好きな〇〇」を、何でも尋ねられるという文構造の特色に気付かせる板書にし、困った時のヒントとして提示する。

② 机間指導

【対話を諦めそうになっている児童をサポート】

表現を確認するなどして児童により添い、粘り強く対話に臨む姿勢をサポートする。よい表現をしている児童を見つけて、モデリングをさせることも効果的である。

＜学習後の児童の感想＞

たくさん英語で話したので、シールをそろえることができたよ。言い方に困っていたら、友達が教えてくれたので、最後まで英語で言うことができてうれしかったよ！

友達の読み取りとのちがいを知り、対話したい思いが高まるように、読みを可視化する

本時、こんな力を育てたい

叙述を基に中心人物の気持ちを読み取り、友達との交流を通して人物の気持ちを多面的に捉える力

本時の流れ

1　中心人物の気持ちが分かる様子や行動を表す叙述、会話文に線を引く。

↓

2　中心人物の心のつぶやきを想像してノートに書き、座標シート（右下図）に位置付け

↓

3　中心人物の気持ちを考えた根拠となる叙述と心のつぶやきを交流する。

↓

4　本時を振り返り、中心人物の気持ちに対する自分の考えを書く。

【授業の概要】

本時は、教材文「サーカスのライオン」において、じんざは男の子の優しさが嬉しかったと考える児童が、ひとりぼっちの寂しさへの共感にも着目できるよう「対話的な学び」の視点から授業づくりを工夫しました。座標シートを使って自分の読みを自覚しながら対話することで、互いの読みを捉えながら中心人物の気持ちを深めていきました。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

じんざは、男の子の「大すき」がうれしいし、男の子が自分と同じひとりぼっちだと知って、また会いたくなったんだね。

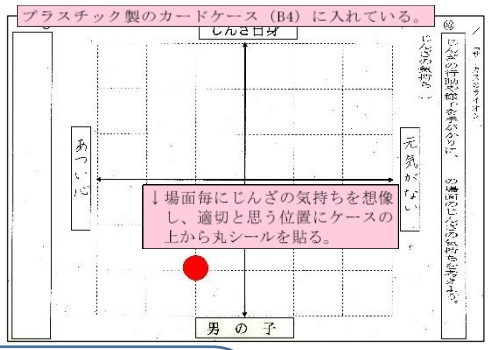
まず、児童は、じんざの気持ちが分かる様子や行動を表す叙述、会話文に線を引き、聞こえてくるじんざの心のつぶやきを想像してノートに書きました。その記述を基に、該当場面のじんざの気持ちが「自分自身に向いているか、男の子に寄せているか」と「元気がないか、心が熱いか」の二つの視点を軸として考え、各自の座標シートにシールを貼って位置付けました。

ここがポイント！　教師の支援

ペア交流では、まず、互いの座標シートから、該当場面のじんざの気持ちの捉えにちがいがあるかどうかを視覚的に捉えるようにしました。こうすることで、友達の考えの根拠となる叙述や、想像したじんざの心のつぶやきを聞きたくなる状況を作りました。

じんざは「男の子にチョコレートをもらってうれしかった」という読みの児童には、対話を通して、”元気がない”から”熱い心”へ読みをシフトさせた児童の考えに注目させました。「一日中ねむっていた」のに「もうねむらないで」待つほど、ひとりぼっちの寂しさが消えたことに気付かせるようにしました。

この対話的な学びを通し、児童は、該当場面の叙述だけでなく、前場面までの叙述と比べながらじんざの男の子を思う気持ちに迫りました。



【座標シート】

＜学習後の児童の感想＞

じんざも男の子もひとりぼっちだったけれど、三の場面で本当の友達になれてうれしかったです。じんざと男の子のきずなが結ばれて、いい場面だなと思いました。

児童の氏名(平仮名)に含まれる「はらい」の数を確かめ、友達と比べる活動を展開する

本時、こんな力を育てたい

児童自身の氏名（平仮名）について、「はらい」の数を明確に把握し、日常生活においてその数を常に意識して書いていこうとする力

本時の流れ

1　平仮名の終筆部分の形状の違いから、「とめ・はね・はらい」の名称を知る。

↓

2　ペアで「はらい」のある平仮名を探していく。

↓

3　ペアでそれぞれの氏名（平仮名）に「はらい」がいくつあるか数え、合わせた数を全体で交流する。

↓

4　「はらい」の筆使いのポイントをつかみ、記名時などそれが含まれる平仮名を書く場面で生かしていく。

【授業の概要】

児童の氏名（平仮名）を範囲として、「〇〇がいくつ」といった数値化によって、他者との比較を促し、多い、少ないといった相対的な位置が分かるようになります。特に、最も多かった児童にとっては、思わぬところで注目され、強く心に残ることでしょう。個別ではなかなか意識しにくい集団ならではの「対話的な学び」の一例と捉えています。

＜学習前の児童の姿＞（教師の思い）

書写の時間に学習したことが、普段の文字に生かされていないなあ。

【本時の学習】

ゴシック体やポップ体などの印刷文字は終筆部があいまいなこともあり、児童の手書き文字でも「はらい」が「とめ」になる課題がよく見られます。そこで、まずは、次の「はらい」の部分をはっきり認識し、それを記名する場面を中心に日常的に意識できるようにします。

《「はらい」のある平仮名》（表記フォント　HG 教科書体）

あ・う・お・け・し・す・ち・つ・の・ふ・み・む・め・も・や・ら・り・れ・ろ・わ・ん（各1か所）、ゆ（2か所）

ここがポイント！　教師の支援

「はらい」に関する先の課題を解決する一つとして、「ここは、はらいだよ。」とはっきり認識することがあげられます。これを促すために、ペアで協働しながら該当する平仮名を探す活動を展開します。そして、この経験をもとに、それぞれの氏名（平仮名）に着目し、「はらい」を数えます。ペアで合わせた数としたのは、「一つもなかった。」という児童がいた場合への配慮です。

このように数値化することの目的は、他のペアと比べたくなる気持ちを高めること、また、相対的に多かった児童を中心に、それを記名の際に「はらいが〇こ」と意識しやすいようにするためです。「ゆ」が含まれる児童にとっても、「２つもある」と印象に残ります。

本時は、「はらい」に着目しましたが、「とめ」「はね」についても、同じように取り上げることができます。そうすることで、また別の児童が活躍する機会となり、互いに認め合う書写学習につながります。

＜学習後の児童「しみず　りゅうのすけ」（仮名）の感想＞

ぼくの名前には、はらいが１０こあって一番多かったよ。それからは、いつもちゃんとはらっているか確かめているよ。

実社会の人の営みを学び、社会的事象の見方・考え方を広げ交流する場面を設定する

本時、こんな力を育てたい

社会的事象の見方・考え方や友だちの考えから、自分の考えを再構成する力

本時の流れ

1　琴平町の人がボランティアに参加している際の様子から課題を設定する。

↓

2　琴平町の人の立場に立ちボランティアに参加する理由を予想し交流する。

↓

3　琴平町の観光案内図をもとに視点をまち全体に広げ、交流する。

↓

4　ボランティアに参加する理由を空間的な見方・考え方から再構成する。

【授業の概要】

香川県の特色ある地域の様子を捉える単元です。

本時は琴平町の人々がボランティアに参加する理由をまちの活性化とつなげるために授業づくりを工夫しました。

社会的事象の見方・考え方を活かしたり、友だちの意見を取り入れたりすることで、まちの人の思いや願いが具体的に見えてくると考えました。

＜学習前の児童の姿＞

金丸座に直接関係ない仕事の人たちがお金をもらうこともできないのに、なぜボランティアに参加するのだろう？

まずボランティアに参加している人たち（代表の竹内さん）の普段のスケジュールとボランティアに参加している際のスケジュールを比較しました。すると、仕事の時間を削って参加していることに対して驚きを感じ「竹内さん達はなぜボランティアに参加するのだろう？」という学習問題を成立させました。

予想の段階で子ども達は琴平町の人たちの思いや願いにまとまっていきました。

ここがポイント！　教師の支援

そこで教師は、空間的な見方・考え方を広げるために、「金丸座に人が集まってほしい」という願いがあるといった子どもの予想を取り上げ、「人が集まるとどうなるのか？」と発問するとともに琴平町の観光案内図を提示しました。

このことから子ども達は、駅から金丸座までの道沿いには色々な店があることに気づき「金丸座に行くにはこの参道を通って行きます。参道にはお土産屋さんなどもあるからボランティアの人たちの本業ももうかると思います。」と発言していきました。

その後子ども達は、「空間的な広がり」を用いて、再構成した考えを発表していきました。「竹内さん達は、金丸座のことだけではなく、自分のお店や琴平町のことも思っていると思います。」とボランティアに参加する理由を捉え直すことができました。

【掲示した琴平町観光案内図】

この対話的な学びから、まちの人たちが地域全体を盛り上げていることを深く理解できました。

＜学習後の児童の感想＞

はじめはボランティアに参加する理由はお客さんのためだと思っていたけど、みんなの意見を聴いて、空間を広げて考えるとまちが少しでもにぎわってほしいからという理由も見つけることができました。

グループ活動のさせ方を工夫することで、目的をもって話し合えるようにする

本時、こんな力を育てたい

いろいろな式が表す意味を図と結びつけて考え、説明する（式を読む）力

本時の流れ

1　クッキーの個数と、その個数を求める式から、式と図をつないで式が表す考えを説明する。

↓

2　４つの式をグループ内で分担し、同じ式を選んだ児童で新たなグループをつくり、よりよい考え方を話し合う。

↓

3　もとのグループにもどり、分担した式の考え方を説明し合う。

↓

4　適用題を解き、振り返りをする。

【単元の概要】（全８時間）

（　）を用いた式や四則混合の式について、計算の順序を知り、計算についての理解を深めます。また、式を見て具体的場面を想起したり、説明をしたりする単元です。

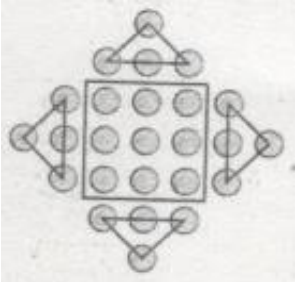
本時では、４つの式が表す意味を、図と結び付けて考え、説明する活動を設定しました。

【本時の学習】（７時間目）

＜学習前の児童の姿＞

今までは、まず問題場面を図にかき、それを式に表して、答えを求めてきたよ。

前時までに、まず問題場面を絵や図にかいて考え、式を導き出し、説明する学習を進めてきました。

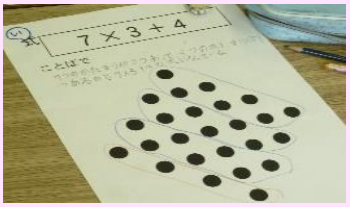


【考えの表し方の例】

本時は、クッキーの個数を求めるための１つの式を全体に提示します。この式の意味を左図のようにかき込み説明しました。その後、７×３＋４等の他の４つの式を示し、それぞれの式の意味を図とつないで、各自で考えていきました。

ここがポイント！　教師の支援

グループ内で特に自分が考えたい式を１つ決め、同じ式を選んだ児童で新たなグループをつくり、どう考えて数えたのかを図を使って説明し合います。図を示しながら話しやすいように、大きめのワークシートを用意しておきます。同じ式でも多様な考え方が出ますが、この後、その考えをもとのグループの友達に伝えるという目的がはっきりしているため、かけ算の意味を考えて図と式を関連させ、お互いが問い返しながら、よりよい考えを見つけ出しました。



【用意したワークシート】

その後、もとのグループに戻り、自分が選んだ式をグループの友達に説明します。説明を聞いた児童は、質問したり、問い返したりしました。自分の説明したことを相手が分かってくれたとき、児童は「できた」という達成感を味わうことができます。相手の説明が理解できた児童は、自分の説明と比べてもっと良い考えはないか探ろうとし、活発な話し合いとなりました。

【同じ式を選んだ児童で考える】

＜学習後の児童の感想＞

式は計算するだけでなく、その人がどう考えたかが表されたものだと分かりました。

４コマ漫画を活用して、自分の考えを説明したり、友達と考えを比べたりする

本時、こんな力を育てたい

自然の事物・現象から見いだした問題について追究し、より妥当な考えをつくりだす力

本時の流れ

1　４コマ漫画を使って、大地のでき方を説明したり、実験方法を確認したりする。

↓

2　予想や実験方法を吟味しながら実験を繰り返し行い、大地のでき方を確かめる。

↓

3　４コマ漫画を使って、実験の結果を記録し、大地のでき方を考察する。

↓

4　学習活動を振り返って、本時の意味づけや次時の問題づくりを行う。

【授業の概要】

地層は、時間、空間の尺度が大きいという特性をもっています。そこで、児童の時間的、空間的な見方を広げたり、表現力、理解力を補完したりする支援として、４コマ漫画を活用しました。本時は、予想の交流と、結果の処理から考察の展開で、児童が４コマ漫画を使って、自分の考えを説明したり、修正したりする場面を設定しました。

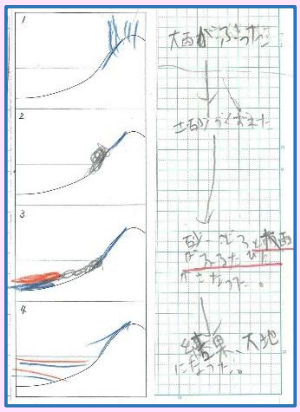
【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

自分が住んでいる地域は、どのようにして海から大地になったのだろうか。砂と泥は、どのようにして交互に重なったのだろうか。

ここがポイント！　教師の支援

前時に、児童は流れる水の働きによる地層のでき方を予想し、４コマ漫画に表現しました。本時までに、教師が児童の考えを類型化し、実験方法、実験道具を児童とともに検討しました。



【４コマ漫画による予想】

活動１では、代表の児童が、拡大した４コマ漫画を使って、砂や泥がどのように堆積していくかを説明しました。４コマ漫画で視覚化されているため、共通点や相違点を見つけるのも容易になります。活動３では、活動２で得た結果をもとに、４コマ漫画を修正し、考察をすることができました。

【４コマ漫画を使っての説明】

活動２では、沈みやすい土を使用し、時間内に何度も実験できるようにしました。結果を吟味しながら何度も再実験することで、自分の考えを確認したり、実験方法を修正したりする姿が見られました。

【実験の様子】

＜学習後の児童の感想＞

実験をすると、自分の住んでいる大地が、どのようにしてできたのかが分かりました。４コマ漫画にすると、自分の考えを表したり、友達の考えと比べたりしやすかったです。

１年間の「楽しかったことベスト３」を考え、友達と話し合う活動を設定する

本時、こんな力を育てたい

１年間を振り返り、友達と話し合うことで、楽しかったことやたくさんの人にお世話になったことに気付く力

本時の流れ

１　入学してからの１年間の日記や作品を見て、思い出ワークシートに出来事を書く。

↓

２　ペアで相談しながら、「楽しかったことベスト３」を決めて、絵と文に表現する。

↓

３　グループで紹介したり、質問したりして、気付いたことをみんなで話し合う。

↓

４　話し合って気付いたことを絵や文に付け加える。

【単元の概要】

ペアで相談し、整理した表をもとに楽しかったベスト３を決めました。理由を説明しながら絵カードをグループで紹介することで、季節や時間の移り変わりや、いろいろな人にお世話になったことに気付くことができると考えました。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

入学した時は、どんなことがあったかな。なんだか、ずいぶん前だなあ。

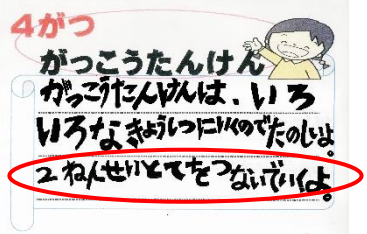
まず、児童は、１年間の思い出を振り返り、楽しかった出来事を話し合いました。教室の掲示や写真などで発表できる児童もいましたが、半年以上前のことは、忘れてしまっていたり、記憶があいまいになって思い違いをしていたりする児童も見られました。

ここがポイント！　教師の支援

そこで、あらかじめ入学してから書きためておいた日記や写真、作品をファイリングしておき、内容や時期を整理できるよう、教師がワークシート（四季別の表）を用意し、時間意識を育てる支援をしました。

また、ペアで相談して「楽しかったことベスト３」を決め、絵カードに表現した後、グループの友達に理由を説明して紹介したり、質問したりする場を設定することで、気付きを広げ、対話による友達との交流を進めることをねらいました。

「ぼくは、運動会のポンポンがきれいだったからベスト１にしたよ。」「こま回しは、～さんが巻き方のこつを教えてくれて、よく回ったよ。」などの発表の言葉から、「そうだったね。」「あ、わたしも同じだよ。」と具体的に思い出したり、共感したりする声が聞こえました。



【話し合いで気付いたことを絵や文で付け加える】

＜学習後の児童の感想＞

お姉さんと、手をつないで音楽室を見たことを思い出しました。ドキドキしながら大きな太鼓を鳴らしたことや、～先生からスタンプを押してもらってうれしかったことも書いておきたいです。

言葉だけによらない対話を生み出すことができるような支援をする

本時、こんな力を育てたい

拍子の違いやそれぞれの拍子が生み出すよさやおもしろさを感じ取ろうとする力

本時の流れ

1　前時の振り返りをして、本時の課題を共有する。

↓

2　「ラバーズコンチェルト」と「メヌエット」を聞き比べる。

↓

3　気付いたことを体の動きや言葉、手拍子などを用いて交流する。

↓

4　他の曲でも拍子を変えて演奏したものを鑑賞し、拍子の違いについて感じ取る。

【授業の概要】

様々な拍子の曲を聴いたり比べたりしながら、それぞれの拍子について学ぶ題材です。

本時では、旋律が似ている3拍子の「メヌエット」と4拍子の「ラバーズコンチェルト」を比較しながら聴き、様々な方法によって検証・吟味することにより、曲の感じと拍子の生み出すよさのかかわりについて考える学習を行いました。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

手拍子をしても何拍子か分からないなぁ。指揮をしても友だちとうまく合わないよ。

まず、それぞれの曲の拡大楽譜を見て、その旋律が似ているということを押さえました。旋律が似ているにも関わらず、異なる感じに聴こえるのはなぜだろう、という児童たちの疑問から課題意識をもち、学習を進めていきました。児童が自分の選択した方法で調べ、気付きについて交流する場面を設定しました。

ここがポイント！　教師の支援

自分が考えた方法で調べる中で、３拍子の曲を４拍子で指揮したり、体の動きを合わせられなかったりする児童もいました。その児童自身も合わせられないことに気付いています。

そこで、指揮がうまくできている友だちと意図的に交流させたり、友だちの動きを真似したりするよう声をかけました。そうすることで、言葉は交わさないものの、４拍子ではなく３拍子であることに気付いたり、友だちの動きを視覚的に捉えてから楽曲と合わせたりする様子が見られました。

そのような活動を通して、それぞれの拍子ならではのよさやおもしろさを見付けるとともに、友だちから学ぶことの有用性に気付くことができました。

【指揮グループが対話する様子】

＜学習後の児童の感想＞

友だちと指揮をしていると、「ラバーズコンチェルト」と「メヌエット」のひみつが分かりました。旋律が同じでも、拍子が違うと曲の感じも違っておもしろかったです。

対話によって自分の考えを広げたり深めたりするために必要感のある交流場面を設定する

本時こんな力を育てたい

面の飾りの形をつくったり、色や材料を選んだりしながら自分のイメージに合うように表し方を吟味する力

本時の流れ

1　前時までの製作を振り返り、本時の課題を確認する。

2　自分のイメージに合うように工夫して面をつくる。

3　自分の面の工夫を紹介したり、友達の工夫の面白さを見付けて伝えたりする。

4　本時を振り返り、自分の頑張りや友達のよさを伝え合いながら次のめあてをもつ。

【題材の概要】

写真や作例等から、自分が変身したいもののイメージを決め、どのような表し方をすればよいかを吟味しながら、面をつくる題材です。自分のイメージに合うように、面や飾りの形をつくったり、色や材料を選んだりしながら製作していきます。

＜学習後の児童の感想＞

【完成した作品】

友達に、色画用紙を尖った形にして周りにつけることをアドバイスしてもらったから、もっと怖くなったよ。

【本時の学習】

【はじめの作品】

＜学習前の児童の姿＞

怖い河童のお化けをつくりたいから、もっと怖く見えるような形や色の飾りをつけたいな。何をどうつけたらいいだろう。

前時の活動で「形や色の工夫をもっと考えたい」「他の材料でもっと工夫できないかな」等の思いをもっていたことを振り返り、本時の「工夫をもっと考えて飾りをつけよう」という課題を設定します。次に、製作の際の工夫の視点（形、色、材料）を確認し明確な視点をもって製作することができるようにします。そして製作中は、必要に応じて自由に、鏡に面をかぶった自分の姿を映して出来具合を確認したり、友達の面を見に行って交流し参考にしたりしてよいというルールにしておきます。

【製作中自由に交流する姿】

ここがポイント！　教師の支援

児童は「もっとイメージに合うようにするには、何をどうつけたらいいのかな」という困り感をもったり「自分の面を見てもらいたい」「友達の作品を見たいな」という思いをもったりしてきます。そこから、進んで交流し、アドバイスをし合っている児童を見付けておき、「〇〇さんたちお互いに見せ合ってアドバイスしていたよ。イメージに合うようにするために、どんな工夫をしたらいいか迷っている人、いろいろな友達の工夫を見たい人は他にもいるかな。」などと教師が全体に声をかけます。そして、他の児童も同じ思いをもっていることを表出させ、「もっとたくさんの友達と見せ合って、工夫を紹介しよう。友達の面白い工夫も、もっとたくさん見付かるよ。」という思いを共有し必要感をもたせて、全体で交流する時間を設定します。

【互いの面に興味をもって交流する姿】

振り返りでは、まず自分が頑張ったことやできたことを発表し合い、認め合う場を設定します。そして、前時の面の写真と見比べることで、友達との関わりによって変容したことに気付かせます。そうすることで対話することのよさについて実感させ、次の時間につなぎます。

「どうしたら上手にゆでられるか」を問い続ける題材構成の中で、思考の可視化を図る

本時、こんな力を育てたい

対話を通して、互いの考えや気付きを比較・関連付けながら理解を深め、生活に活かしていこうとする力

本時の流れ

1　「ゆでフェス　ファイナルステージ」の結果をもとに、本時のめあてをつかむ。

↓

2　なぜ○班がグランプリを獲得できたかを考え、各班で意見をまとめる。

↓

3　全体交流で、グランプリ班のサラダの出来ばえのよさと「ゆで時間」の関係について考える。

↓

4　本時を振り返り、見いだしたことを生かした家族のためのの「ゆでメニュー」の調理計画を完成させる。

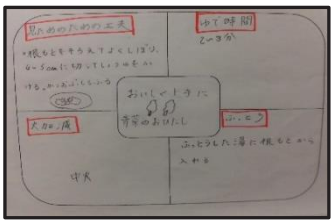
【授業の概要】

本題材は、「ゆでる」調理の基礎的・基本的な技能を身に付けるとともに、自分の食生活に活用できることをねらいとしている。

調理実習の経験をもとに、児童がもつであろう「ゆで時間によって上手にゆでられたかどうかが決まるのでは」という予想を確かめながら、「どうしたらおいしく上手にゆでられるか」を問い続けられるよう、調理→振り返りの交流→次の調理の計画を繰り返す題材構成にした。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞
上手にゆでるには、「ゆで時間」が大きく関係しているのでは？



【マンダラマップに次の調理計画】

「ゆでフェス　1st ステージ」で、子どもたちは「ゆで卵」の調理経験から得た気付きをもとに、「卵を好みの固さにゆでるためのポイント」について話し合った。個やグループから出された意見を「マンダラマップ」に整理することで、「ゆで時間」「火加減」「沸騰」「見た目のための工夫」という自分たちなりのキーワードでまとめた。それをもとに、「2nd ステージ」では、「青菜のおひたし」「ゆでいも」の調理、試食・審査・投票を行った。食材を変えて調理と振り返りを繰り返し、「上手にゆでるには」を問い続けるうちに、子どもたちは食材に合った「ゆで時間」があることに気付き始めた。

ここがポイント！　教師の支援

活動２＜３回目の調理の振り返り＞

前時に「ゆでフェスファイナルステージ・サラダ部門」で、３種類の野菜（ブロッコリー、キャベツ、にんじん）を使ったゆで野菜サラダを計画、調理、試食をした。前回の振り返りと同じように「ゆで時間」「火加減」「沸騰」「見た目の工夫」の観点で話し合ったが、経験を重ねてきたこと、そして食材が複数になったことにより、「切り方」「ゆでる順番」も大事ではないかという意見が出され、マンダラマップの観点が多様になった。

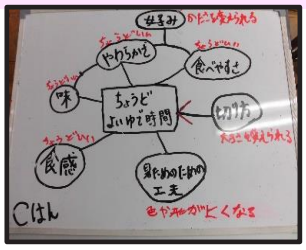
活動３－①＜題材や本時の課題を再確認＞

全体交流にあたり、本時のめあてである「家族のためのゆでメニューレシピ完成」と、これまでの自分たちの予想（ゆで時間が一番のポイントではないか）を再確認した。

活動３－②＜視点をしぼった話し合い＞

「ゆで時間」を中心にして、他の観点とのつながりを考えるイメージマップをつくることを教師から提案した。すると、子どもたちは、それぞれの観点がどうつながっているかを、これまでの調理や試食を通して得た実感や気付きをもとに、話し合いながらマップを作成していった。そして、食材や好みに合ったゆで時間を考えて調理することはとても大切だと理解するとともに、「沸騰」や「切り方」「ゆでる順番」を意識することで、色や見た目もよくなるということを見いだしていった。

＜学習後の児童の感想＞
上手にゆでるために、食材に合ったゆで時間を意識することが大切だとわかった。自分の好きな食材も上手にゆでられそうだ。



【イメージマップ】

課題の解決に向けて、チームで対話を重ねながら、思考を深める場面を設定する

本時、こんな力を育てたい

既習事項を踏まえて、チームで対話を繰り返しながら、課題解決できる力

本時の流れ

1　ドリルゲーム（ゆりかご・前転・台に手をついてのジャンピングゲーム）を行う。

2　既習事項を振り返り、学習課題を確認する。

3　台上前転という技の一連の流れの図を見ながら、技を部分的に分解することで課題を明確にする。

4　チーム毎に台上前転を行いながら、それぞれの部分の技のポイントについて話し合う。

5　技のポイントを意識して練習することで、学習課題が解決できたかを確認する。

【授業の概要】

器械運動では、「技のできばえ＝かっこいい」を、意識して学習を進めます。

本時は、「台上前転」の分解図を部分ごとに分解することで、技のポイントを見付け、技のポイントについて練習する中で、対話的に学ぶ力を伸ばします。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞
台上前転をやってみたけど、スムーズに回れなかったし、かっこよくなかったよ。スムーズに回れて、かっこよくできるポイントがあるはずだ。

まず、前時に行った台上前転の感想を聞き、児童の感想をうまくいったこと、いかなかったことの２つに分けました。そうすることで、スムーズでかっこよくできるポイントについて焦点化し、具体的にイメージしながら授業に臨めるようにしました。

ここがポイント！　教師の支援

器械運動では、体の感覚(締める、緩めるなど)を呼び起こし、育むことが重要です。また、技の系統性を踏まえた基本的な技や感覚づくりの運動をドリルゲームの中に取り入れることで、何回も繰り返し行うことができます。繰り返すことで体の感覚を呼び起こし、育むことができます。それが技のできばえ、習熟につながります。

ここがポイント！　教師の支援

台上前転を、①助走まで②ドリルゲームでの「台の上でのジャンピングゲーム」③前転の３つ部分に分けてみていきます。そうすることで、それぞれの部分で大切なポイントが明確になり、練習するべき自分の課題となるポイントが見えてきます。しかし、自分の姿は自分には見えません。自分が練習で見てほしいポイントが明確になったことで、チームで教えたり、聞いたりする姿が多く見られるようになりました。また、ICT を使ってポイントについて話し合うようになりました。友達のアドバイスや ICT の映像からポイントをクリアしていくことで、夢中になって台上前転に取り組み、歓声が聞こえたり、ガッツポーズが見られたりしました。

ポイントを明確にすることで、自分の課題が焦点化され、チームの中で多くの話し合いが見られるようになりました。

【タブレット PC の活用】

【技の一連の流れを示す図】

友達に見てもらいアドバイスをもらうことで技の伸びや習熟が図られることに、子どもたちは気付くことができました。

＜学習後の児童の感想＞
チームの友達に自分の課題であるポイントを見てもらうことで、課題を克服でき、スムーズに台上前転ができました。次は「かっこいい」台上前転を目指したいです。

価値について、自分の考えと比べながら他者の感じ方や考え方を聞く場を設定する

本時、こんな力を育てたい

「親切」「思いやり」の価値について、対話を通して自己の考えを見つめ、実践につなげようとする力

本時の流れ

1　事前アンケートに書いた自分の経験や、教材文への書き込み、感想から、学習問題をつかむ。

2　異なる二つの「ぼく」の行動について、どちらが親切だと思うかを話し合う。

3　中心場面の「ぼく」の気持ちをクラゲチャートに書き、交流する。

4　友達との交流を通して考えた「親切」「思いやり」について書き、学習を振り返る。

【授業の概要】

児童が問題意識を継続し、意欲的に学習に取り組めるよう、総合単元的道徳学習（単元名「３年１組いきいき輝くなかま大作戦！」）を構想した。本時は、進んで親切な行為をするのはよいことだと思っているが、親切の多様性には気付きにくいという実態から、多様な考えを引き出し交流に生かせるようにしたいと考えた。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

男の子は、知らない人に「荷物、持ちます。」と自分から言えて、とても親切だなと思った。

導入で、事前の書き込みや感想を紹介した後、登場人物の表情の変化に目を向けられるような助言を行いながら挿絵を示し、学習問題へとつないだ。そして、自分の考えを基にした交流の場を設定した。

ここがポイント！　教師の支援

① 多様な感じ方や考え方にふれることができるよう、「おばあさんに声をかけたぼくと、そっとついていったぼくでは、どちらが親切なのか、なぜそう思うか」を話し合う場を設けた。

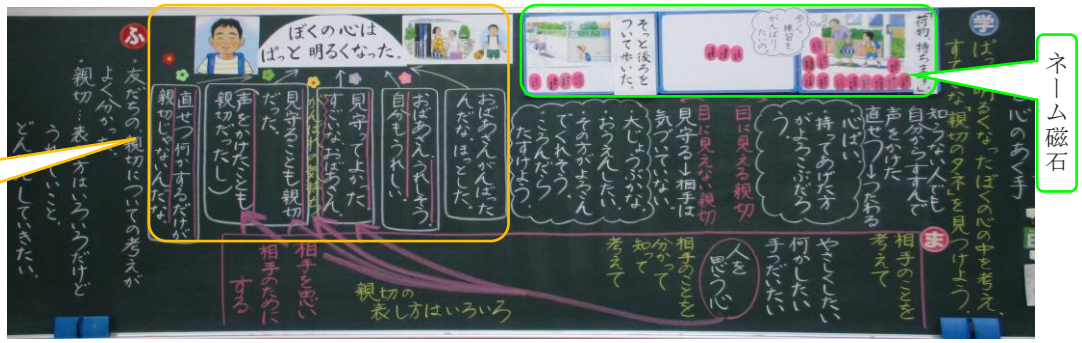
② 自分事として考えるためにネーム磁石で立場を明らかにした上で、交流につないだ。

③ 中心場面の主人公の気持ちを考える際には、クラゲチャートを活用した。そのように行動できたぼくの気持ちを多面的に考え話し合うことで、学んだ心を様々な状況で使っていこうとする実践意欲につながると考えた。

たくさん並んだクラゲチャートの足の部分には、「親切」「思いやりの心」についての様々な考えが表れ、友達の考えのよさに気付いたり、どれも「親切の花」が咲く気持ちや行動だと気付いたりする姿にもつながった。終末、花の形のカードを出し、児童の親切にできていた姿を紹介したところ、「自分にもできそうだ」という実践への意欲の高まりが見られた。

＜学習後の児童の感想＞

友達の、親切についての考え方を聞けてよかった。ぼくにも「親切のタネ」があるかな。親切って、表し方はいろいろだけど、うれしいことだから、相手のことを考えて、どんどん「親切の花」を咲かせていきたいな。



【本時の板書】

伝えたい、知りたい情報のやり取りを行う言語活動を設定する

本時、こんな力を育てたい

聞き手を意識して表現や伝え方を工夫したり、自然な反応を返しながら聞いたりして、相手と思いを伝え合おうとする力

本時の流れ

1　ウォーミングアップをする。　Small Talk

↓

2　ペアで夏休みの思い出について紹介し合う。

↓

3　中間評価を行う。

↓

4　相手を変えながら、多くの友達と伝え合う活動を行う。

↓

5　本時の振り返りをする。

【授業の概要】

本単元では、言語活動の内容として、「夏休みの思い出」という児童にとって身近で興味の持てる題材を扱う。過去形を用いることで、児童への負担は大きくなるが、文法事項に過度にこだわることなく、伝え合いたいという意欲を大切にした単元計画、授業づくりを心がけた。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

楽しかった夏休みの思い出を英語で話したいし、友だちの話を聞くのは楽しみだな。

【本時に使う表現を繰り返し練習して自信をつける】

児童はこれまで友達と思いを伝え合う活動を各単元で行っており、言語活動に対する抵抗は少なくなってきている。

しかし、過去形を使って英語で表現する際、自信の無さが感じられた。ウォーミングアップで本時に使う表現を練習して自信をもたせるとともに、思いを伝えよう、相手のことを知ろうとする気持ちを持ってやり取りするよう意欲付けた。

ここがポイント！　教師の支援

①「やってみせる」指導を大切にする

外国語学習では、伝えたい、知りたい情報をやり取りする言語活動を行いたい。話し手が一方的に話すのではなく、自然な反応を返しながらやり取りを行えるようにしていく。笑顔でうなずく、繰り返す、質問するなど段階的に反応の方法や表現を増やしていくことが求められる。

そのためには、教師の「やってみせる」指導が重要である。教師が児童の話す内容に共感したり驚いたり、既習表現を使って質問したりする機会を意識的、継続的に設けることで、英語を使うモデルとなるようにする。本時においても教師が ALT との Small Talk や児童との対話で、積極的に反応している姿を見せるようにした。

② 中間評価を行い、言語活動の質を高める

本時は、言語活動を行った後、中間評価を行った。共感的な反応を返しながら聞いたり、相手の反応を確かめながら話したりしているペアを紹介して価値付ける。また、会話が続かなくて困っているペアを紹介して、児童に発話が続く方法を考えさせたり、教師がアドバイスしたりする。このような中間評価を行うことで、後半の言語活動の質が高まった。

＜学習後の児童の感想＞

- 英語で話すのは不安だったけれど、共感的な反応を返してくれたり、質問してくれたりして話が盛り上がった。
- 過去の話をするときに、難しい言い方があったけれど、友だちが言いたいことを分かってくれて安心した。

文章構成マップで、共通教材の学びを活用する

本時、こんな力を育てたい

事実と意見などの文と文の関係に着目しながら読み、文章全体の構成と展開を捉え、要旨を把握する力

本時の流れ

1　前時に共通教材『動物の体と気候』の要旨をまとめたことを振り返り、本時の課題を設定する。

2　これまで並行読書を進めてきた、自分が選んだ説明文の要旨をまとめる。

3　まとめた要旨について、友達と交流し、それを基に自分の考えのよさを実感したり、修正したりする。

4　できたこと・分かったこと、さらにチャレンジしたいことの観点で学習を振り返る。

【授業の概要】

本単元では、自分が選んだ生き物に関する説明文を読み、その内容をブックガイドにまとめて紹介するという言語活動を設定しました。本単元で作成するブックガイドには、主に文章構成マップと作品の要旨を書いていきます。ブックガイドを作成する言語活動を通して、学習指導要領「Ｃ読むこと」の指導事項アを指導していきました。

【本時の学習】

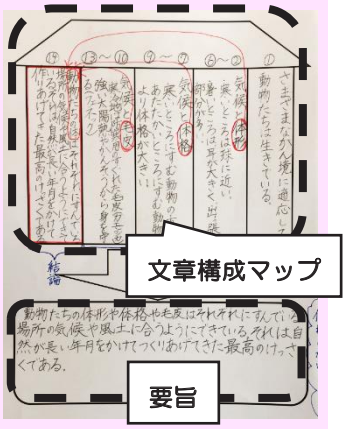
＜学習前の児童の姿＞

前時までに、「動物の体と気候」の文章構成マップを使い、文章全体の構成や展開を捉え、要旨をまとめてきたよ。

本時は、「自分が選んだ作品でも要旨をまとめたい」という意識から課題を設定しました。子どもたちは、共通教材「動物の体と気候」で要旨をまとめた経験から、自分の力で要旨をまとめられるという自信を高めています。そして、自分が選んだ作品の要旨をまとめる際にも、これまでと同様に文章構成マップを用いて、文章全体から要旨を考えていくことが大切だという意識を持っています。

ここがポイント！　教師の支援

課題解決の際には、共通教材『動物の体と気候』で作った文章構成マップにより、学んだことを活用できるようにしました。子どもたちは、「序論、本論、結論、それぞれに伝えたいことが入っているか」という視点で自分が選んだ説明文の要旨を見直していきました。



同じ説明文を選んでいる友達と交流する際には、自分が考えた要旨が分かりやすいものになっているか話し合い、よりよい要旨になるよう推敲していきました。

振り返りで、「できたこと」について、その理由を問うと「〇〇ができたのは、常に、文章全体からまとめた要旨になっているかと確かめながら考えたのがよかったからだ」「〇〇さんが、あのとき～と言ってくれたから分かりやすい要旨になったんだ」のように自分の考え方や協働のよさに気付いていきました。

＜学習後の児童の感想＞

自分が選んだ説明文でも要旨をまとめられたから、もっと他の作品でも要旨をまとめてみたい。

きまりの合理性をつかむために、「どうしてこの筆順？」と考える活動を取り入れる

本時、こんな力を育てたい

筆順の原則（きまり）の根拠を考えながら、そこには字形を整えるための合理性があることを理解し、それに沿って書いていこうとする力

本時の流れ

1　「中（外側）を先」に書く漢字について、正しい筆順を確かめながら原則を知るとともに、その根拠を考える。

↓

2　別の筆順（左から等）で書いてみて字形の整えやすさを比べ、原則の合理性に気付く。未習の漢字にも生かして書いてみる。

↓

3　「つらぬく縦（横）画を最後」に書く漢字について、上記１と同様の活動を進める。

↓

4　別の筆順（最初や途中）で書いてみて、上記２と同様の活動を進める。

【筆順の原則について】

文部省編『筆順指導の手びき』（昭和 33 年）には、二つの大原則と八つの原則が示されています。本時は、このうち、原則３、４、６、７に該当するものを扱っています。その他の原則等詳しくは書写教科書教師用指導書に掲載されています。

＜学習前の児童の姿＞

筆順（書き順）って、一つ一つ覚えなきゃならないし…。大切なものなのかな？

【本時の学習】

書写において、筆順は、書く過程そのものであり、字形を整えることに大きく関わっています。そして、今なおあまり知られていませんが、原則（きまり）としてまとめられています。この原則と合理性を理解するという「深い学び」が、字形を整えることにつながります。

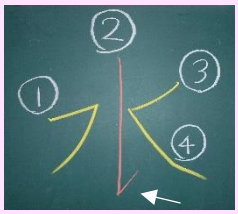
本時は、児童が筆順の原則に沿って書くことの利点と効率性を実感することを目指した事例です。

【各原則に該当する1～3年配当漢字例】

原則3→小・糸・水・赤・少・京・当・光・楽…（例外→火）
原則4→円・日・月・田・回・国・同・内・肉・羽・間…
原則6→中・車・手・半・書・申・神・事・平・羊・洋…
原則7→女・子・字・母・毎・海・船・安…（例外→世）

ここがポイント！　教師の支援

導入でちょっとした工夫をします。「漢字クイズ」として、正しくない筆順で点画を板書していき、書こうとしている漢字を随時児童が当てていくのです。その際、後につながる支援として、原則が分かりやすいように部分の色を変えて板書したり、あえて字形をくずしたりします。



【板書例】

児童は、漢字が明らかになるたびに筆順の間違いを指摘します。これに応じる形で、教師は、正しい筆順とその理由を尋ねます。児童は、二通りの筆順で書いてみて、字形の整えやすさを比べ、それをもとに正しさの根拠を主張します。

その後、「筆順クイズ」として、児童の氏名等身近な漢字（未習のものも可）も含めて出題し、原則の有効性を確認することができるようにします。

＜学習後の児童「神内京子」（仮名）の感想＞

自分の名前全部が四つの筆順のきまりにぴったり当てはまっていてびっくりしました。何か筆順が宝物みたいに思えます。

比較・関連付けを促す問いを設定したり空間的視野を広げる資料を活用したりする

本時、こんな力を育てたい

庄内平野と香川県の米づくりを比較することで、香川県の米づくりの課題を解決するために庄内平野の米づくりから学べるものがないかについて考えようとする力

本時の流れ

1　既習の香川県と庄内平野の米づくりの取り組みを比較し、香川県の米づくりでもうからない理由を見つける。

↓

2　話し合いを通して複数見つかったもうからない理由を焦点化する。

↓

3　焦点化されたもうからない理由について解決方法を考える。

↓

4　ＪＡの人の話を手紙で紹介する。

＜学習後の児童の感想＞

マイナスイメージだった耕作放棄地を使うことで香川県の米づくりのプラスになるんだね。でも一人では大変だから地域で共同して作業するといいね。実際にこのような農家が増えているんだね。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

香川県の米づくり農家は、後継ぎがいなくて、続けていくのは難しそう。そうなると耕作放棄地が増えて、香川県の田んぼは大変なことになるよ。香川県の米づくりがもうかればなあ。

香川県、庄内平野の米づくりの取り組みをカードにして比較しやすくした。このカード操作を通して、児童は以下の５つをもうからない理由として挙げた。

【黒板に掲示したカード㊀香川県　㊁庄内平野】

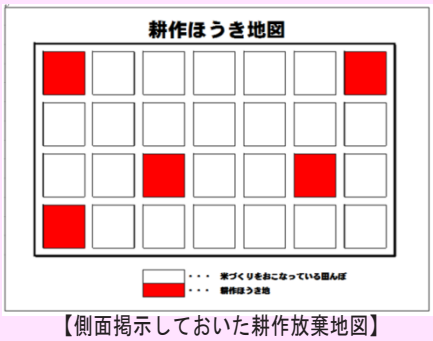
ここがポイント！　教師の支援

比較・関連付けを促す発問

焦点化するのに困っている児童に対して機械の値段や田んぼの特徴について「香川県ではどうだったかな。」などと問いかけた。そうすることで「中・小型機械での作業」「ため池から水を引く」を庄内平野より劣っているように見えるが、実は香川県の狭い土地条件を生かした強みになっていることに児童は気付くことができた。そして「耕地面積が狭い」ことがもうからない一番の理由と考えた。

空間的な視野を広げる資料の活用

解決方法を考える際、初めは「耕地面積を広げる」という意見が多かったが、前時で学習した耕作放棄地を利用して「耕地面積を増やす」と考える児童の発言があった。



【側面掲示しておいた耕作放棄地図】

そして、右図を活用して放棄地を一件の農家がいくつも借りて米づくりを行うとどうなるか考えた。児童は、「借りた田んぼどうしの距離が離れているため作業効率が悪い」という空間を意識した発言や「一人にかかるお金の負担が大きい」など個人での米づくりの限界に気付くことができた。

着目させたい見方（統合的な見方）を明確にして活動を工夫する

本時、こんな力を育てたい

直角三角形の求積において学んだ見方をもとに、一般の三角形の求積における見方を見いだす力

本時の流れ

1　直角三角形の面積は、既習の長方形の面積をもとに考えたことを想起させ、解決の見通しをもつ。

↓

2　直角三角形の面積の求め方を活用して、一般の三角形の面積の求め方を考える。

↓

3　それぞれの考えの共通点を話し合い、どの考えも、長方形の面積の半分であるとみる見方をしたこと気付く。

↓

4　既習の図形に帰着させる見方・考え方の有用性を振り返り、他の図形の求積への探求意欲をもつ。

【単元の概要】（全１２時間）

直線で囲まれた基本的な図形の面積について、必要な部分の長さを測り、既習の長方形や正方形などの面積の求め方に帰着させ計算によって求めたり、新しい公式をつくり出し、それを用いて求めたりすることができるようにします。

【本時の学習】（２時間目）

＜学習前の児童の姿＞

直角三角形の面積は、長方形の面積を半分にして求めることができたよ。

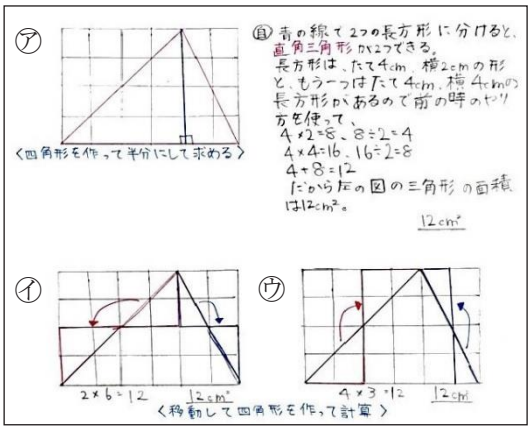
既習内容を振り返る際には、既習の求積方法をもとに、長方形の面積の半分とみる見方を想起させました。

方眼上にかかれた三角形を提示することで、長方形の半分の面積とみる見方が、一般の三角形についても考える手がかりとなりました。出てきた求積方法は比較・分類し、以下の３つに整理しました。

① 図形の一部を移動して、計算による求積が可能な図形に等積変形する考え

② 既習の計算による求積が可能な図形の半分の面積であるとみる考え

③ 既習の計算による求積が可能な図形に分割する考え



【児童のノート】

ここがポイント！　教師の支援

さらに、以下のような見方に着目させました。

㋐　周りに作った長方形の面積の半分とみる考え

㋑　縦の長さを半分にした長方形の面積とみる考え

㋒　横の長さを半分にした長方形の面積とみる考え

３つの考えを比較して共通点を話し合うと、どれも長方形をもとにして、その半分の面積を求めているという統合的な見方に気付けました。そこで、長方形の面積の公式に帰着して、(縦)×(横)÷２で求められることを確認しました。

振り返りの際には、再度、既習の図形に帰着させて考えるよさを価値づけ、この数学的な考え方が他の図形の求積の手がかりとしてスパイラル的につながっていくようにしました。

＜学習後の児童の感想＞

直角三角形ではない三角形の面積も、長方形の面積の半分になると分かって、びっくりしました。

根拠を明確にしながら予想したり、結果をもとに考察したりする場を設定する

本時、こんな力を育てたい

これまでの実験の結果や事実をもとに、根拠のある予想や仮説をたて、それに基づいて実験結果を考察しようとする力

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞
なぜ、乾電池の数を２個に増やすとモーターの回る速さや時間が変わるのだろう。

本時の流れ

1　並列つなぎの電流の大きさを予想する。

↓

2　並列つなぎの電流の大きさを予想し、その理由を交流する。

↓

3　電流の大きさを測定し、考察する。

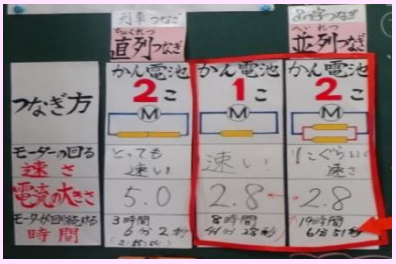
↓

4　本時を振り返り、感想や新たな疑問等を書く。

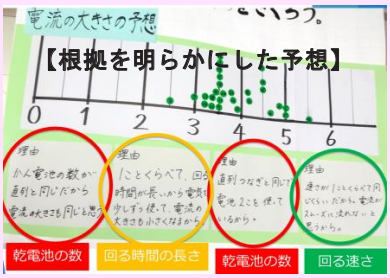
ここがポイント！　教師の支援

①　根拠を明確にした予想

前時までの直列つなぎの学習の過程で、乾電池の数とモーターの回る速さや時間を関係付けて考えていた経験を想起させることで、並列つなぎの電流の大きさを予想する際にも、児童は回る速さや時間と関係付けて思考するようになる。その際、見方・考え方を働かせて考えている姿を価値付けることで、児童は進んで理科の見方・考え方を働かせて考えようとするようになる。



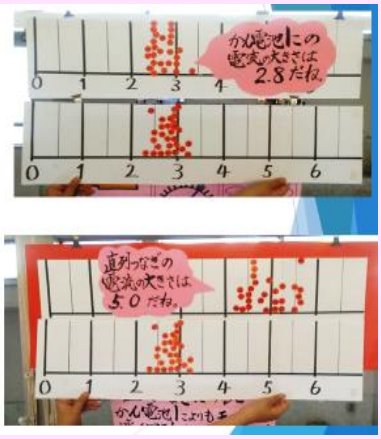
【つなぎ方の比較表】



【根拠を明らかにした予想】

②　実験結果を可視化

予想した電流の大きさや実験結果の数値は、一目で見てわかるように数直線図に示した。これにより、１人ひとりの予想や実験結果が板書上に位置付き、自分の学びが学級全体の学びにつながっている意識をもたせることができる。また、乾電池１個の時や２個直列つなぎの時と並列つなぎの時の電流の大きさが比較しやすくなる。児童は、並列つなぎの電流の大きさは乾電池１個のときの電流の大きさとあまり変わらないことが明確に捉えられ、そこで得られた知識をもとにモーターが長く回る理由を考えようとする。



【結果を比較する様子】

＜学習後の児童の感想＞

乾電池を三個に増やすと回る時間はもっと長くなるはずだ。乾電池の数を増やし、直列つなぎと並列つなぎを両方組み合わせると、速くて長い時間回るハンディファンをつくることができそうだな。

植物の特徴を知ることで、よりよい世話の仕方に気付き、実行する場を設定する

本時、こんな力を育てたい

自分の世話の仕方を振り返り、よりよい方法を考え、実行していこうとする力

本時の流れ

1　どんなミニトマトになってほしいか確認し、世話の仕方を振り返る。本時の課題を設定する。

↓

2　アサガオのときにはなかった世話の仕方を確認する。

↓

3　脇芽を採ることのよさを知る。写真をもとにした脇芽クイズをする。

↓

4　これからどのような世話をしていきたいか考え、世話に対する意欲をもたせる。

【授業の概要】

野菜を育て、成長に気付く単元です。ミニトマトを育てました。

本時は、子どもたちの願いでもある「おいしいミニトマト」を育てるための世話の仕方を考えました。今までの経験をもとにしつつ、今回は「脇芽」に焦点を当て、学習を進めました。はじめは、せっかく出た葉（脇芽）を採ることに抵抗がある児童もいました。しかし、脇芽を採ることの意味やよさを学ぶことで、植物によって世話の仕方が異なることにも気付くことができました。

【本時の学習】

まず、どのようなミニトマトに育ってほしいか確認しました。そして、そのためには、水を与えるだけでなく、他の世話の仕方もあるのではないか、という問いが生まれました。

「支柱を立てる」「肥料を与える」「日が当たるところに鉢を移す」など、アサガオを育てた経験から、いろいろな世話の仕方が挙げられました。そして、今回は「アサガオを育てたときにはなかった世話の仕方」として、「脇芽を採ること」を学ばせました。

＜学習前の児童の姿＞

せっかく大きく育っているのに、どうして採るの。トマトがかわいそうだよ。

ここがポイント！　教師の支援

はじめは、脇芽を採ることに「トマトがかわいそうだ。」「脇芽を採ったら葉っぱが減ってしまう。」と抵抗がある子どももいました。そこで、なぜ脇芽を採るのか、班で調べることにしました。教師が用意した図鑑から探したり、教科書を隅々まで読んだりして、一緒に発見していきました。そして、それぞれの班の調べからわかったことをもとに、「実にたくさんの栄養を送るため」「日当たりや風通しをよくするため」に脇芽を採るということを全体で確認しました。脇芽を採ることのよさを確認したことで、脇芽を採ることは、ミニトマトの世話をするうえで必要なことだと実感できました。

その後、脇芽クイズを行い、自分で脇芽を見分けられるように練習した後、実際に脇芽を採りに行きました。「これで、おいしいトマトになるね。」など、自分のトマトの成長を楽しみにしながら採る児童が多く、より愛着をもてたようでした。

＜学習後の児童の感想＞

最初は、脇芽を採るのは、かわいそうだなと思いました。だけど、おいしいトマトになるためには、大切なお世話だということがわかりました。これからは、どんどん見つけて、脇芽を採って、おいしいトマトになってほしいで

【脇芽をとっている児童】

児童が多面的に音楽に関わることができるよう、題材計画を工夫する

本時、こんな力を育てたい

演奏の聴き比べをして、それぞれの演奏のよさを感じ取る力

本時の流れ

1　３人のピアニストの演奏の「ピアノ協奏曲第１番」、第２主題、エンディングを聴き比べる。

↓

2　それぞれの演奏の特徴をワークシートに書く

↓

3　各グループで意見を交流し、発表する。

↓

4　鑑賞の学習活動のまとめをする。

↓

5　両手で弾くピアノの曲を練習する。

【グループで意見を交流する児童】

【全体交流で友だちの意見を聞く】

【本時の学習】

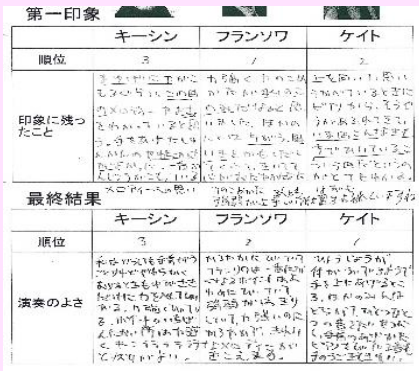
＜学習前の児童の姿＞
３人のピアニストの演奏には、どのような違いやよさがあるのだろう。

ピアノにスポットを当てた大単元を計画しました。「ピアノの構造を知ろう」では、調律師を招いてピアノの構造や仕組みを理解しました。「私のレパートリー」では、全員が両手で弾くピアノ曲に取り組み、学期末に発表会を行いました。

本題材「私がしん査員」では、ピアノコンクールの審査員になった気持ちで、３人のピアニストの演奏を聴き比べ、それぞれの演奏のよさから優勝者を決める活動を設定しました。

教材として使用したショパン作曲『ピアノ協奏曲第１番』は、ピアノという楽器の特色を十二分に生かした傑作で、演奏家の表現が全面に表れ、児童が演奏のよさを見つけるのに適していると言えます。児童の集中力が保てるよう、短く映像を編集し聴き比べがしやすいようにしました。

ここがポイント！　教師の支援



第一印象

	キーシン	フランソワ	ケイト
順位	3	1	2
印象に残ったこと	[illegible]	[illegible]	[illegible]

最終結果

	キーシン	フランソワ	ケイト
順位	3	2	1
演奏のよさ	[illegible]	[illegible]	[illegible]

個人での聴き比べの際には、音の様子を言葉で表せるよう、例となる言葉集を配布しました。

また、【速さ】【強弱】【音色】といった、音楽の基となる部分と、個人の感想である【感じ】を分けて書けるようワークシートの工夫をしました。

その後のグループでの話し合い活動では、児童の交流が活発に行えるよう、教師がグループを回りながら「いい意見だね！」「詳しく言うとどういうこと？」と、言葉かけを行いました。また、各グループの意見を一斉に見ることができるようワークボードにまとめ、全体で交流しました。

＜学習後の児童の感想＞
友だちの意見を聞いて、自分では気付けなかった演奏のよさを見つけることができました。ピアニスト一人一人が自分の思いをもって演奏していることが分かりました。

形から見取ったイメージを広げるために、新たな視点や技法を提示し話し合う場を設定する

本題材で、こんな力を育てたい

いろいろな視点から見取った形を基に、何度も試しながら材料に働きかけようとする力

本題材の流れ

1　粘土を握り、いろいろな形をつくってみる。

↓

2　握った形をいろいろな方向から見、想像をふくらませる。
①自分で
②みんなで

↓

3　握った形を見て思い付いた生き物を「手のわざ」を使ってつくる。

↓

4　自分や友達の作品を見て振り返る。

【授業の概要】

握った粘土の形から思い付いたことを基に、手を働かせながらイメージを形にしていく題材です。

最初に浮かんだイメージにとらわれず発想をふくらませていくことができるように、上下左右など、新たな視点を提示し、全体で見合う場を設けました。

また、表したい形を試しながら表現するよう、道具ではなく、「手のわざ」を使うよう支援しました。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

土粘土はやわらかいから気持ちいいなあ。いろんな形ができそう。

【握った形から試す】

粘土のなめらかな手触りや可塑性を十分に味わうことができるように瓦用の粘土を一人 800 グラム程度を用意し、３つに分けられるよう糸で切り目を入れて渡しました。

まず１つの塊から球をつくり、いろいろな握り方を試してみます。そして、握った形からイメージをふくらませます。

【みんなで見る】

【使いたい手のわざ】

【手のわざを使って】

ここがポイント！　教師の支援

始めは、握った形についた指の形から、なんとなく「顔」を思い浮かべた児童が多かったのですが、拡大された画面で、粘土を上下や左右など、いろいろな方向からみんなで見ることで、自分と異なる視点から見た友達の意見を参考にしたり、違う方向から見直したりしながら発想の幅を広げていきました。そして，「亀の甲羅」「小さい恐竜の背中」と、具体的につくりたい生き物の姿をイメージするようになりました。

また、イメージした形を表す時に必要な「手のわざ」を短い言葉で画像と共に提示することで、多様な表現が生まれ、鑑賞の時間にも作品の工夫を見取るポイントとして意識させることができました。

＜学習後の児童の感想＞

始めは「顔」しか思い浮かばなかったけど、〇〇さんが「上から見たら甲羅みたい。」と言ってくれました。それで、「進化した羽の生えた亀」にしました。

指で押して模様をつけました。

【ワークシートを見ながら鑑賞】

「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせ、根拠をもって考え、表現する場を設定する

本時、こんな力を育てたい

食品を組み合わせておいしく食べるための調理計画を考え、調理の仕方を工夫する力

本時の流れ

1　家庭で作る朝食の野菜いためにに使う食品を考え、作り方と理由を書く。

↓

2　選んだ食品の切り方やいためる順番などを交流する。

↓

3　全体で交流し、保護者のアドバイスを聞いて、新たな考えをもつ。

↓

4　家庭で作る野菜いための食品や作り方を再考する。

【授業の概要】

自分の朝食を見つめ、課題を設定し、いためる調理を学ぶ題材です。

本時は、いためる調理実習を振り返り、自分の家でも実践しようと計画をしました。

その際、生活の営みに係る見方・考え方である「健康」の観点で自分の計画を見直すことができるように、保護者の力も借りて価値付けを行いました。その後、再考することで生活につなぐ授業づくりができると考えました。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

いつも朝ごはんを作ってくれている家族に、ぼくが野菜いためを作って、食べてもらいたいな。家族みんなが好きな食品を入れて、喜んでもらえる野菜いためにしたいな。

まず、前時の調理実習を振り返り、成功体験として価値付けることで「家族のために朝食の野菜いためを考えて作りたい」と家庭実践への意欲を高めました。次に、野菜いために使う食品とその切り方や調理の手順を考え、ワークシート（計画書）に記入させました。調理計画や手順の根拠があいまいな児童も多かったため、新たな観点に気付かせるために、お互いの考えや根拠を交流する場を設定しました。

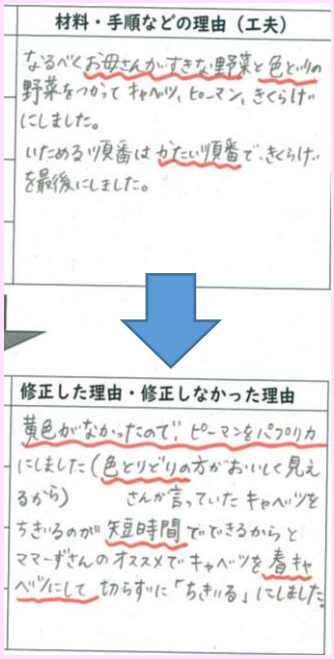
ここがポイント！　教師の支援

活動３＜保護者による観点の価値付け＞

交流の中で、自分と友達の考えを比較し、アイデアを取り入れたいという児童が多くいました。しかし、自分の好みにしたいという意識が強く、「健康」等の観点を意識できていない児童もいました。そこで、全体交流では「家族の好み」「短時間」「栄養のバランス」「旬」の観点について、ゲストティーチャーの保護者にアドバイスをもらい、板書上にまとめました。

活動４＜成長を実感できるワークシート＞

価値付けられた観点を基に、根拠をもって調理計画を再考し、ワークシートに書くように指導しました。事前に書いた計画書と比べ、新たな観点が増えていることを実感できるようにしました。本題材の学習を通して、「生活の営みに係る見方・考え方」の一つである「健康」という言葉の理解が深まり、自分の生活とつないで概念化できました。



【成長を実感できるワークシート】

＜学習後の児童の感想＞

いつも作ってもらっているけれど、休みの日は私が朝食を作るよ。旬の野菜は安くて栄養価が高いから、なすを入れよう。妹の苦手なピーマンは小さくきざんで、食べてもらえるようにしよう。

子どもが試行錯誤したくなるような課題を提示する

本時、こんな力を育てたい

課題を解決するにはどうすればよいかを考え、話し合ったり、動きを工夫したりする力

本時の流れ

1　様々な補助具を使い、全員が水に浮けることを確認する。

↓

2　グループで使える補助具の数を制限し、自分が使いたい補助具をグループで話し合う。

↓

3　自分の使う補助具での浮き方を工夫する。

↓

4　「浮き浮きタイム」で、一定の時間をグループ全員が浮けるか確かめる。

【授業の概要】

本授業では、水遊び「もぐる・浮く運動遊び」の浮く遊びを中心に行いました。低学年では、水に対する恐怖心をもつ子がいます。まずは、浮くための補助具をふんだんに使い、水に浮く心地よさを感じることから始めました。全員が浮く心地よさを感じられた後、徐々に補助具なしで浮くための体の使い方や浮き方の工夫を学習しました。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞
水に浮くのは怖いなぁ。プールの床から足を離したくないよ。

自分が心地よく浮ける補助具を選択し、水に浮いたときの心地よさを十分に味わえるようにしました。全員が浮けていることを確認し、称賛した後、グループで使える補助具の数を制限し、その中でグループ全員が浮けるかという課題を提示しました。

ここがポイント！　教師の支援

グループで使える補助具の数を制限することで、今までたくさんの補助具を使っていた児童が補助具を少なくして浮くにはどうしたらよいか考えるようになります。初めは、使う補助具を変える児童が目立ちますが、次第に頭や顔を水に付け、腕や足を広げて、浮き方の工夫をする児童が増えてきました。

そのような児童が増えてきたら、全体で浮き方の工夫を共有することが有効です。共有することで、水の苦手な児童も補助具の数を減らさずに頭を付けたり、足を伸ばしたりして、水面で体をまっすぐにしようとするようになりました。また、グループ内でお互いの動きを見ようとするかかわりが生まれ学びが深まりました。

使っていない補助具の数だけボーナス点を付けると、できるだけ少ない補助具で浮こうという意欲が高まりました。

本授業では、全員が水に浮く心地よさを感じていたからこそ、児童は工夫をしながら何度も運動遊びに取り組みました。また、子どもが色々と試したくなるような課題を設定することで、児童の意欲が高まるとともに、試行錯誤をしながら、よい動きを引き出すことができました。

【浮き浮きタイムに補助具を使い浮く児童】

＜学習後の児童の感想＞
水に浮くのは、気持ちいいね。腕や足を伸ばしたり、頭を水に付けたりすると補助具が少なくても浮くことができたよ。

【深い学び】　小学校第５学年　道徳科　主題「誰もが気持ちよく過ごせるために」　教材「お客様」

自らの経験を想起し、様々な視点で考えながら、道徳的価値への理解を深める問いを設定する

本時、こんな力を育てたい

自分事として捉え、新たな価値観に気付き、実践につなげようとする力

本時の流れ

1　登場人物の迷いを理解し、そこに生じる問題について自分の考えを持つ。

↓

2　友達と交流する中で、多様な価値観に触れ、自分の考えを広げる。

↓

3　全体交流で、新たな視点から問いを持ち、価値への考えを深める。

↓

4　自らの経験を振り返り、これからの自分の在り方をまとめる。

【授業の概要】

登場人物の心情や行動から、規則を尊重するとはどういったことかについて考えを深め、社会生活の中で大切なことを守ろうとする態度を養う教材である。本時は､「決まりは守らなければならない」といった考えに社会的な役割や義務、権利といった視点を取り入れることにより、さらに深い学びになるように問いを工夫する。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

一部の人のために、楽しい気持ちが、台なしになってしまう。

教材を一読し、どんなことが問題となっているのか把握する。次に、主な登場人物である主人公の「わたし」「係員」「他のお客」という三者の言動を基に、それぞれの立場や気持ちを理解できるようにしていく。そこで、「もし、自分がその場にいた客の一人であったなら、どんな気持ちになるだろうか。」という発問を中心にして、一人一人が考えをもてるようにした。

ここがポイント！　教師の支援

①児童一人一人が考え持った後、友達の考えを聞く場を設定する。

②グループで交流し、友達同士で自由に考えを聞き合うようにする。多様な価値観に触れる状況をつくることにより、価値への理解を深めていくようにする。

③全体交流では、児童の考えを板書しながら、三者の「立場」「義務」「権利」の視点で問いかける。

・「係の人は、誰のために注意したのか」

・「相手に受け入れてもらうために、どのように注意をすればよかったのか」

・「客は、自分の権利を主張するだけでよいのか」

様々な視点で問いかけ、考えを揺さぶることで、考えをさらに深めることができる。道徳的な問題に対する問いを繰り返し持たせることで、価値について捉え直し、より深い学びへとつなぐことができた。

【互いの考えを交流する】

＜学習後の児童の感想＞

みんなの立場を考えると、自分勝手に権利を主張できない。相手のことを考えてルールを守らないといけない。

「できる」という表現に慣れ親しむために、できるだけ多くの人と交流する場を工夫する

本時、こんな力を育てたい

Ｉcan～．において活用した表現方法を、三人称を使う場合にも活かして、友だちや先生の紹介方法を工夫して表現していこうとする力

本時の流れ

1　先生方のできること・できないことの紹介の仕方がわかる。

↓

2　先生方にできること、できないことを質問し、グループ毎に情報を整理する。

↓

3　分担を決め、紹介カードを作成し、発表練習をする。

↓

4　グループ毎に発表（Who is he/she?　ゲーム）を行い、良かった点、改善点をふり返る。

【授業の概要】

既習の「Ｉcan ～.」から活用して三人称（he she）の言い方を用いて先生方のできること・できないことを紹介する学習です。

６年間共に過ごした友達についてはよく知っているので、先生方について紹介するようにしました。研究授業の場を利用してたくさんの先生方に質問することで、発話の機会が増え、コミュニケーション能力の育成にもつながると考えたからです。

【本時の学習】

＜学習前の児童の姿＞

ＡＬＴの言っていることがよく分からない。

言い方はわかっているけれど、大勢の前で話すのは苦手だなあ。

先ず教師が「先生紹介カード」を提示し、例を示しました。（〇〇 sensei can run fast. But he can't cook.Who is he? 等）次いで、先生方にできること・できないことを尋ね、グループ毎に紹介カードを作りました。

【紹介カード】

ここがポイント！　教師の支援

自信がもてるようにするために、インタビューカードを準備し、全員が何人もの先生方に聞く機会を設けました。一人一人が同じ質問を何度も繰り返すことで発音に慣れさせることにもつながっていきました。

カードに記入していく時、書く活動については、まだ十分ではないので、絵カード（単語付き）を提示しておき、写させるようにしました。

【インタビューカード】

グループ毎の発表練習では、大きな声で自信をもって話すことができるよう、互いのスピーチについてアドバイスし合えるよう話しました。中にはジェスチャーを取り入れる工夫をするグループもありました。

最後にグループ毎にゲーム形式で発表し合いました。よく知っている友達だけではなく、普段はあまり交流のない先生のことも知ることができるので、どの子も興味を持ってゲームに取り組むことができました。

＜学習後の児童の感想＞

- 初めは不安だったけど、”Who is ～?”、”I can～.”を何回も言ったので、少し自信がついた。
- 他の学年の子にもできることを聞いて、交流してみたいと思った。

さぬきの教員　かかわりの三訓

一　共感的に受け止め

二　チームの力で

三　毅然と粘り強く

香川県教育委員会

さぬきっ子　学びの三訓

一　準備して

二　姿勢整え

三　しっかり聞こう

香川県教育委員会